

藤井寺市

# 川 北 遺 跡 2

バイパス送水管（藤井寺～長吉）整備工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書



# 序 文

本書は、当センターが藤井寺市川北1丁目で平成27年度に実施したバイパス送水管（藤井寺～長吉）整備工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書です。

川北遺跡は、藤井寺市に所在し、奈良盆地から大阪平野に流れる現大和川と北流する石川との合流地点の下流に位置し、現大和川の北側に広がっています。

遺跡の南方には、百基以上の大小様々な古墳が築かれている古市古墳群が立地しています。また、東側および南側には、旧石器時代から近世にかけての複合遺跡である船橋遺跡が隣接しています。

調査地は、宝永元(1704)年に大和川が現代の位置に付け替えられて以降、水田として活用されてきました。前回の調査では、古代から中世にかけての砂礫の堆積層および流路を検出し、それらの上・下層から古代の水田を3面検出することができました。

今回の調査では、古代から中世までの7面の調査を行い、4面の耕作面を検出することができました。旧大和川左岸側の水田の拡がりや、土地開発の状況を考える上で重要な成果と言えます。

最後になりましたが、調査にあたっては、地元の皆様をはじめ、大阪広域水道企業団事業管理部東部水道事業所、大阪府教育委員会、藤井寺市教育委員会など関係諸機関の方々のご指導、ご協力を賜りました。この場を借りて厚く感謝申し上げますとともに、今後とも当センターの調査事業により一層のご理解、ご支援を賜りますよう、よろしくお願い申し上げます。

平成28年2月

公益財団法人 大阪府文化財センター

理事長 田 邊 征 夫





# 例 言

1. 本書は、大阪府藤井寺市川北1丁目地内に所在する川北遺跡15-1 調査区の発掘調査報告書である。
2. 発掘調査はバイパス送水管（藤井寺～長吉）整備工事に伴い、大阪広域水道企業団事業管理部東部水道事業所から委託を受け、大阪府教育委員会文化財保護課の指導の下、公益財団法人大阪府文化財センターが実施した。
3. 発掘調査、整理作業の受託契約、受託期間、および調査体制については以下のとおりである。

受託契約名	バイパス送水管（藤井寺～長吉）整備工事に伴う川北遺跡（その2） 発掘調査委託
受託契約期間	平成27年8月3日～平成28年3月15日
現地調査期間	平成27年8月3日～平成27年9月30日
整理期間	平成27年10月1日～平成27年10月30日
調査体制	事務局次長 江浦 洋 調整課長 岡本茂史 調整課長補佐 金光正裕（平成27年8月1日～9月30日まで） 調査課長 岡戸哲紀 調査課長補佐 金光正裕（平成27年10月1日から） 専門員 小野久隆・森屋美佐子・片山彰一(写真室)
4. 本書で用いた現場写真は小野・森屋が撮影し、遺物写真については、写真室が担当した。
5. 調査に際しては、大阪府教育委員会、大阪広域水道企業団事業管理部東部水道事業所のご指導・ご協力を得た。
6. 本書の作成および執筆、編集は小野・森屋が行った。
7. 本調査に関わる図面・遺物・写真などの資料は、公益財団法人大阪府文化財センターにおいて保管している。広く活用されることを希望する。

# 凡 例

1. 標高は、東京湾平均海面（T.P.）の数値を用いた。
2. 座標は、世界測地系(測地成果)を使用し、平面直角座標系第Ⅵに準拠する。単位はmであるが、図中では単位を省略している。
3. 本書で用いた北は座標北である。座標北に対して、磁北は $6^{\circ} 47' 18''$  西へ、真北は $0^{\circ} 12' 42''$  東へそれぞれ偏移する。
4. 現地調査ならびに遺物整理は、当センターの定めた『遺跡調査基本マニュアル』2010に準拠した。
5. 土色標記は小山正忠・竹原秀雄編『新版 標準土色帖』平成19（2007）年版（農林水産省農林水産技術会議事務局監修・財団法人日本色彩研究所色票監修）に準拠した。
6. 遺構番号は、遺構面・種類に関係なく、検出順にアラビア数字の通し番号を付与し、その後に遺構の種類を標記した。
7. 各遺構図・遺物実測図の縮尺は、それぞれの図に縮尺を明記したスケールを付している。原則として全体図を100分の1とし、必要に応じて他の縮尺を用いた。遺物実測図の縮尺は4分の1を基本とした。木製品の炭化部にはアミカケを施した。なお、写真図版の遺物において、土器などは任意の倍率である。
8. 遺物実測図中の各遺物に付与した番号は、写真図版と一致する。  
なお、写真図版のみの掲載遺物に関しては、47から掲載順に付与している。
9. 古代の遺物に関しては、以下の文献を参考にした。  
小森俊寛 2005 『京から出土する土器の編年的研究  
—日本律令的土器様式の成立と展開、7世紀～19世紀』 （有）京都編集工房

# 目 次

序 文  
例 言  
凡 例  
目 次

第 1 章	調査に至る経緯と経過	1
	第 1 節 調査に至る経緯	1
	第 2 節 発掘調査・整理作業の経緯と経過	1
第 2 章	位置と環境	3
	第 1 節 遺跡の位置と地理的環境	3
	第 2 節 歴史的環境	4
	第 3 節 既往の調査	5
第 3 章	調査の方法	6
	第 1 節 現地調査	6
	第 2 節 整理作業	6
第 4 章	調査成果	8
	第 1 節 基本層序	8
	第 2 節 検出遺構と遺物	10
第 5 章	総括	18
	写真図版	
	報告書抄録	

# 挿 図 目 次

第1図	調査区位置図	1	第9図	2トレンチ 1溝 断面図	12
第2図	調査区配置図	2	第10図	2トレンチ 第2面 平面図	12
第3図	周辺の地形環境図	3	第11図	2トレンチ 第4面 平面図	13
第4図	周辺の遺跡分布図	4	第12図	2トレンチ 第6面 平面図	14
第5図	地区割図	7	第13図	2トレンチ 第7面 平面図	15
第6図	2トレンチ 断面図	9	第14図	2トレンチ 出土遺物	16
第7図	1トレンチ 出土遺物	11	第15図	2トレンチ 出土木製品	16
第8図	2トレンチ 第1面 平面図	11			

# 写 真 図 版 目 次

図版1	遺構		図版6	遺物	
1.2トレンチ	第1面	全景(北から)	1.1トレンチ	出土遺物	
2.2トレンチ	第2面	全景(東から)	2.2トレンチ	第1層～第2面・第2層	
図版2	遺構			出土遺物	
1.2トレンチ	第2面	1溝断面(東から)	図版7	遺物	
2.2トレンチ	第3面	全景(東から)	1.2トレンチ	第3層	出土遺物
図版3	遺構		2.2トレンチ	第4・5層	出土遺物
1.2トレンチ	第3面	足跡(北から)	図版8	遺物	
2.2トレンチ	第4面	全景(南から)	1.2トレンチ	第6・7層	出土遺物
図版4	遺構		2.2トレンチ	出土種子・木実	
1.2トレンチ	第6面	全景(北から)	図版9	遺物	
2.2トレンチ	第7面	全景(西から)	1.2トレンチ	出土木製品	
図版5	遺構		図版10	遺物	
1.2トレンチ	南北断面		1.2トレンチ	出土木製品	
	第1層～第5-1層(東から)				
2.2トレンチ	南北断面				
	第3-2層～第7層(東から)				
3.2トレンチ	南北断面				
	第5-6層～第7層(東から)				
4.2トレンチ	下層確認トレンチ				
	第8～第11層・風倒木痕(北から)				

# 第1章 調査に至る経緯と経過

## 第1節 調査に至る経緯

川北遺跡は、大和川と石川の合流地点の西北西側の藤井寺市に所在する、弥生時代中期から室町時代にかけての遺跡である（第1図）。宝永元（1704）年に現代の川筋に付け替えられた人工河川である現大和川の北側に位置し、東端および南側は船橋遺跡に、北東側は本郷遺跡と隣接する。

遺跡発見の経緯は、大阪府立藤井寺養護学校（現大阪府藤井寺支援学校）建設による。本校舎の建設に伴い、大阪府教育委員会が昭和55年度に試掘調査を行ったところ、用地内の一部で布留式期の遺構・遺物が検出されたことを受け、昭和56年度に本調査が実施された。その結果、弥生時代中期の土器群や後期の方形周溝墓・壺棺など、古墳時代の竪穴住居・井戸などが検出された。

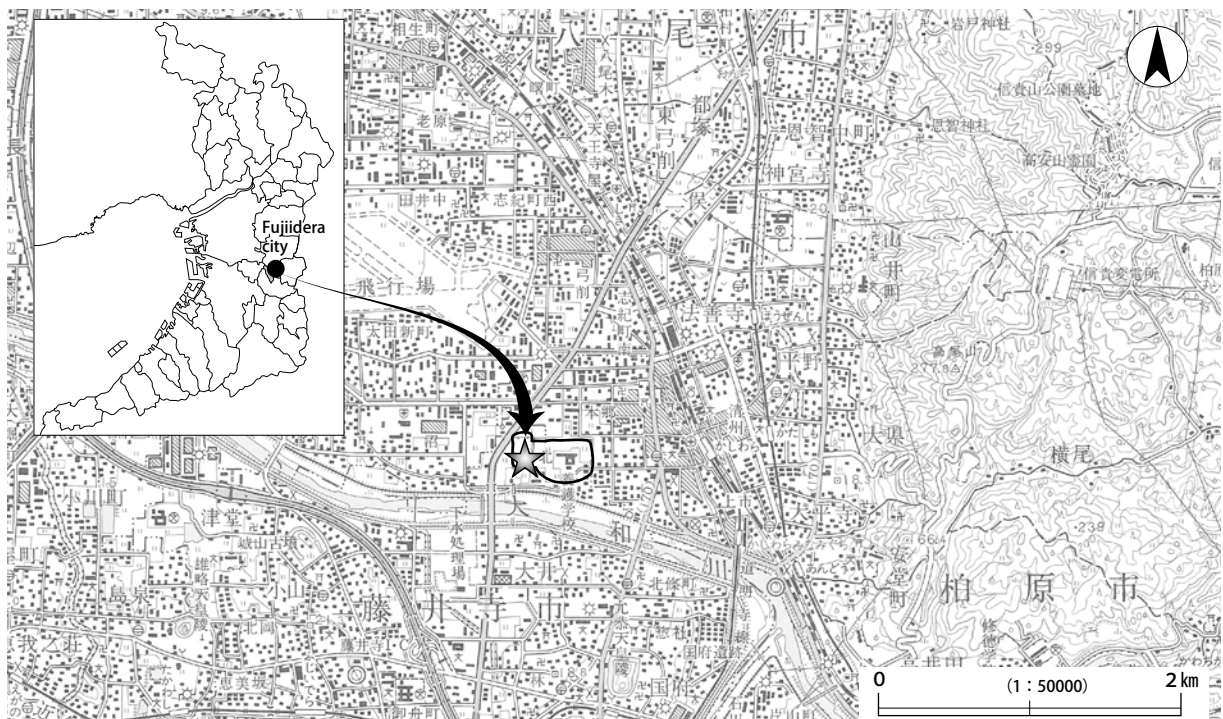
ついで、大阪広域水道企業団東部水道事業所が進めているバイパス送水管（藤井寺～長吉）整備工事に伴う埋蔵文化財発掘調査は、平成24年度に大阪府教育委員会が藤井寺ポンプ場内の2箇所を試掘調査を行い、古墳時代から古代にかけての遺物が検出されたことから、遺跡範囲が西側に拡張された。

それに伴い、平成25年度に公益財団法人大阪府文化財センターが現地調査を行い、旧大和川の本流および古代から中世にかけての水田を検出している。

さらに、大阪府教育委員会が平成26年度に藤井寺ポンプ場内で2箇所追加試掘調査を行い、古墳時代から中世の遺物を検出したため、平成27年度に当センターが本調査を実施することとなった。

## 第2節 発掘調査・整理作業の経緯と経過

調査地は、藤井寺ポンプ場内の南端部に位置する。調査地の形状は一辺約10mの方形で、2箇所合



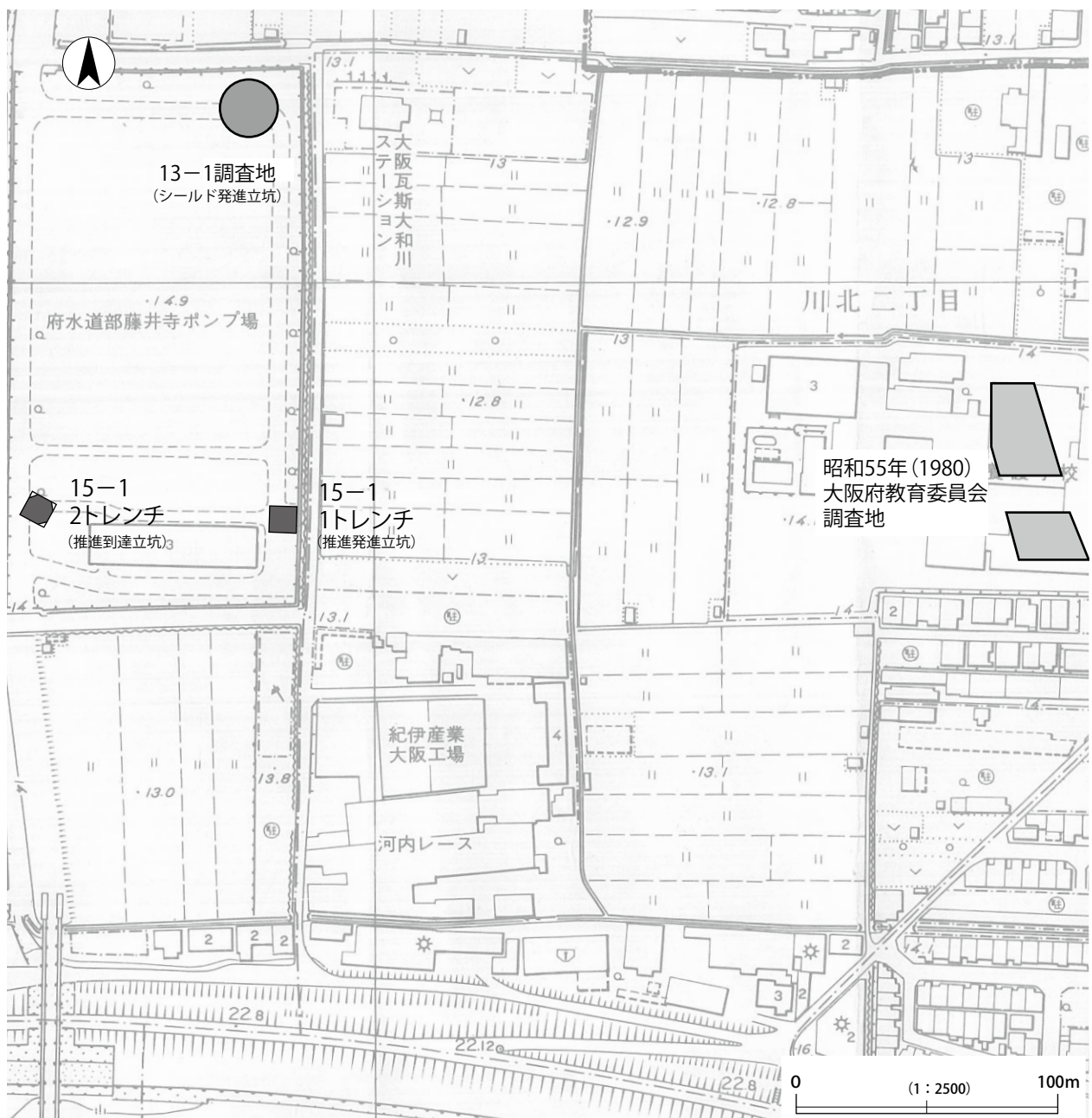
第1図 調査区位置図

わせた面積は 181 m<sup>2</sup>である。平成 27 年 8 月 3 日から機械掘削を開始し、8 月 21 日から人力掘削による遺構面の調査に着手し、同年 9 月 30 日に調査を終了した。

調査は、調査区域内の遺構面の存否を確認すべく、鋼矢板を打設して地表下 2.0 m までを機械掘削し、以下、人力掘削によって地表下 4.0 m まで中世～古代にかけての地層があることを確認した。

以上の調査では、コンテナパッドに換算して 3 箱におよぶ遺物が出土し、調査が終了した翌月の 10 月 1 日から 10 月末までに、南部調査事務所において、報告書作成に向けた出土遺物の整理作業を行った。

遺物整理では、現地で作成した図面のトレース、遺物の抽出・接合並びに実測、各種台帳の作成・整備を実施し、遺物挿図のトレース・版下作成、遺物の写真撮影と遺構・遺物の写真図版作成、遺物の収納、報告書原稿の執筆をそれぞれ実施し、本報告書の刊行をもって総てを終了した。



第2図 調査区配置図



## 第2章 位置と環境

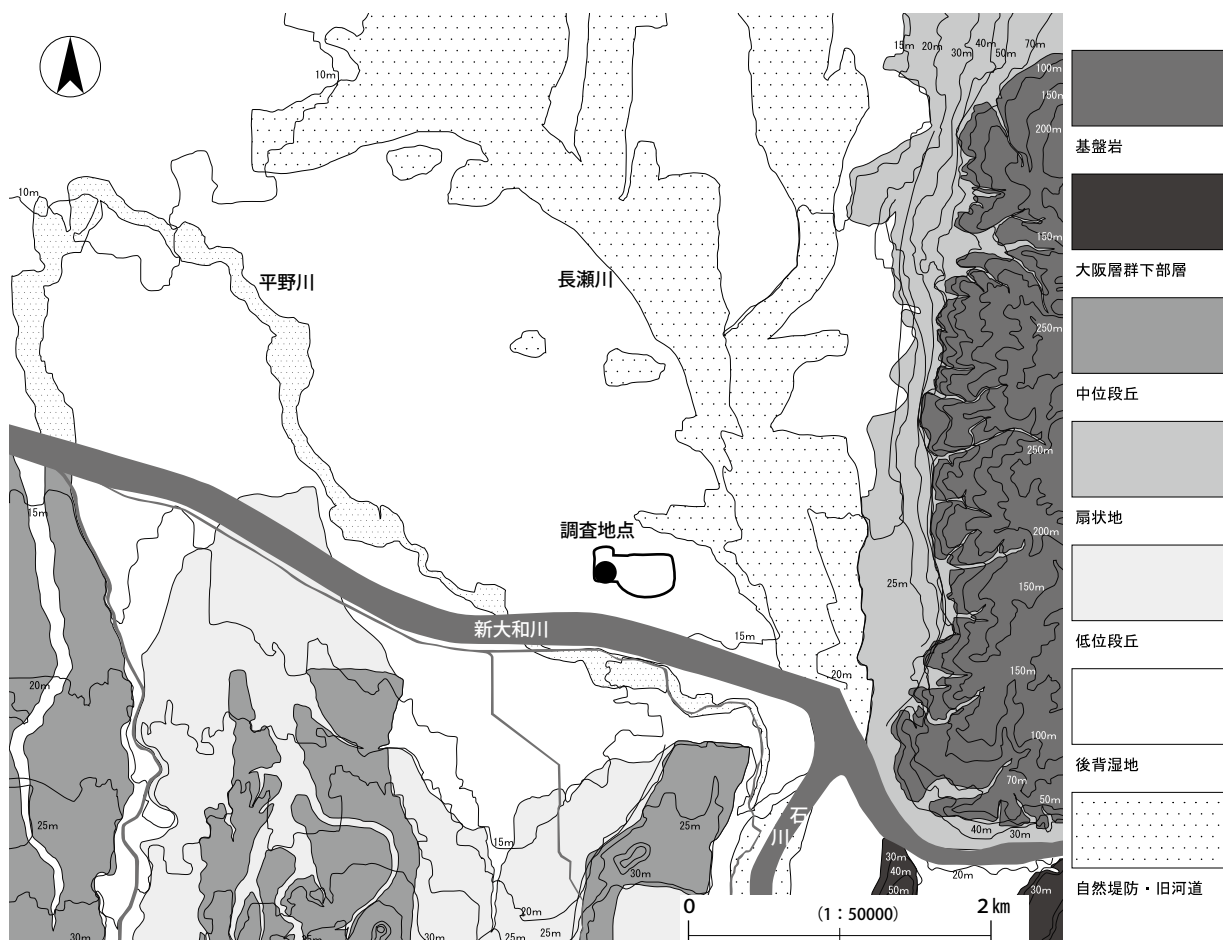
### 第1節 遺跡の位置と地理的環境

川北遺跡は、藤井寺市の北端部に位置する川北1丁目・2丁目に所在する弥生時代から中世にかけての複合遺跡である。その範囲は、南北約300m、東西約500mにおよび、今回の調査地は、大和川が西流する約300m北側の大阪広域水道企業団の藤井寺ポンプ場の南端部に位置している。

本遺跡周辺の地形環境は、大きくは沖積平野に分類される。巨視的にみると、調査地の東側には生駒山西麓の扇状地が展開し、南側には羽曳野丘陵、河内台地が広がっている。さらに、北側には石川と合流したのち、北西に向かって流れていた旧大和川水系の中小河川によって形成された沖積低地が展開している。今回の調査地は、河内平野南部の羽曳野丘陵・台地の北方約1.4kmの沖積低地上に立地し、現状では後に形成された沖積層に覆われている。

調査地の標高は、現地表面でT.P.+14.3mを測り、ほぼ平坦であるが、ポンプ場造成時点で約2.0mの盛土がなされていることから、本来の地表面はT.P.+12.3m前後の水田面である。

なお、最下層の古代の水田面の標高は、T.P.+10.5m前後であることから、2m強の堆積層が存在していたことになる。



第3図 周辺の地形環境図 (別所2002を元に遺跡範囲および調査区を追記)

## 第2節 歴史的環境

本遺跡が立地する河内平野南部には、多数の遺跡が点在し、かつそれらの考古学的な調査成果については重要なものが数多く存在している。本節では、川北遺跡に近接する遺跡の動向を概観しておく。

【船橋遺跡】 大和川と石川が合流する西側の現大和川を挟んで南北に広がる大規模な遺跡で、北西部で川北遺跡に隣接している。縄文時代から近世までの複合遺跡で、1948年に現大和川の川床で遺跡が発見されたのを端緒に数次にわたり調査が行われている。河内橋の周辺では、縄文時代晩期後葉の遺物包含層が広範囲に広がっており、集落の可能性を窺わせる。弥生時代前期から中期にかけては、左岸側で水田の拡がりや中期の墓域が確認されている。さらに、弥生時代後期末から古墳時代前期の遺構・遺物については、右・左岸を問わず遺跡内の各地点で検出され、大規模な集落が存在していることが判明した。また、右岸側では、飛鳥時代から奈良時代にかけて、左岸側では古代末から中世前期にかけての遺構面の拡がりや確認でき、時期により中心域が移動していることが推定された。

【本郷遺跡】 船橋遺跡の北側および川北遺跡の北東側に隣接する、長瀬川の氾濫原および自然堤防上に立地する縄文時代から近世にかけての複合遺跡である。調査では、弥生時代後期後半の溝から小銅鐸が出土している。また、古墳時代前期の庄内式期後半から布留式期前半にかけての井戸や庄内式期中頃から後半にかけての方形周溝墓が検出されている。

【西大井遺跡】 当遺跡の南西側に位置し、国府台地と羽曳野丘陵先端の中位段丘に挟まれた谷底平野の谷口付近に立地する旧石器時代から近世の複合遺跡である。数次にわたる調査で、弥生時代後期後半から古墳時代前期庄内式期にかけての土坑が4000基以上検出されている。



第4図 周辺の遺跡分布図



さらに、その上層から古墳時代前期の水田や溝が検出されている。他に、同時期の方形周溝墓・竪穴住居・井戸などの検出を見る。

【国府遺跡】 船橋遺跡の南側に隣接し、国府台地の北東部に立地する旧石器時代から中世の複合遺跡である。明治年間にすでにその存在が知られ、大正年間には縄文時代前・晩期の埋葬人骨群が多数確認されたことにより、全国的に知られるようになった。

また、旧石器時代後期の国府型ナイフ形石器の標識遺跡としても著名である。弥生時代については、後期末の溝が1条検出されたのみで詳細は明らかではない。

なお、平安時代末から鎌倉時代初頭の建物群周辺の礫群中から巴形銅器が出土している。

### 第3節 既往の調査

川北遺跡は、昭和55年に大阪府立藤井寺養護学校（現藤井寺支援学校）の本校舎の建設計画が持ち上がり、旧石器時代から近世におよぶ周知の船橋遺跡の約200m北という近接地にあることから、埋蔵文化財の存在が予想されたため、大阪府教育委員会文化財保護課により同年2月27日から3月5日にかけて試掘調査が実施された。その結果、用地内の一部で古墳時代前期布留式期の遺構・遺物が検出されたことから、同年4月21日から7月18日までの期間、本調査が行われた。

本調査は、試掘調査の結果から、用地内のやや西寄りでも南南東から北北西方向の溝が存在することが予想されたために、その推定位置を中心に幅約20mの調査区を設定し、そのうちの校舎にかかる約1400㎡について調査が実施された。調査区は校舎の配置に伴って2区に分けられた（第2図）。

調査は、古墳時代前期の遺構面までの地表下約1mを機械掘削し、青灰色シルト層上面で遺構を検出している。遺構面は、南端でT.P.+12.6mであり、北へわずかに傾斜し、北端ではT.P.+12.4mを測る。弥生時代後期の方形周溝墓および壺棺墓を各1基、古墳時代前期初頭の竪穴住居3棟、井戸2基、土坑・ピットなどが検出されている。さらに、下層確認のための調査では、暗青灰色シルト上面で、弥生時代中期の土器群と後期の溝を検出している。

弥生時代中期の土器群は、第Ⅲ様式の完形もしくは完形に近いものが15点中12個体あり、その中でも9点が生駒西麓産のものである。ほとんどのものが穿孔されていることや出土状況で一定の間隔を保ち正立に近いものが多くあることなどから、方形周溝墓の周溝出土とも考えられる。

弥生時代後期の方形周溝墓および壺棺墓、溝などから出土した土器は、出土量が少なく全容は不明であるが、後期前半に属すると考えられる。

古墳時代前期の竪穴住居、井戸、溝、土坑から出土した土器は、井戸の1基が庄内式期の新しい段階でそれ以外は、布留式期の後半に属すると考えられる。

平成25年度の調査では、古代から中世にかけての水田と旧大和川の本流の一部を検出している。砂礫層から出土した大量の遺物のうち、弥生時代以降の遺物は風化せずに出土していることから、近くに集落のある可能性を示唆できよう。

## 第3章 調査の方法

### 第1節 現地調査

発掘調査の実施に当たっては、基本的に『(財)大阪府文化財センター 遺跡調査基本マニュアル』2010に沿って行った。

調査場所の呼称については、受託年度(西暦下2桁)－発注番号(発注順)を組み合わせで標記する原則に基づき、15－1調査区とし、東側を1トレンチ、西側を2トレンチと呼称している。

地区割りについては、世界測地系(測地成果2011)に基づく平面直角座標系第VI系を基準とし、第I区画から第IV区画までを用いた(第5図)。

これに準じると今回の調査地の第I・II区画上の位置はF6－15となる。遺物の取り上げも座標系に即しており、取り上げ区画には最小単位を10mとする第IV区画までを用いた。

盛土および現代耕作土を機械掘削で除去後、以下順次、人力掘削を行った。

検出遺構の測量に関しては、各遺構面の平面図を基本的に縮尺50分の1の平板測量により作成し、個別の遺構図は遺構に応じて縮尺を設定し、平面図および断面図を作成した。調査区の層序を観察するために、1トレンチでは東側、2トレンチでは西側の南北方向に、縮尺20分の1の断面図を作成した。

なお、各遺構面および全体断面や各遺構の検出状況・断面などを、35mmカメラ・6×7カメラ・デジタルカメラで、適宜、撮影を行った。

現地では発掘調査とともに、出土した遺物の洗浄・注記・遺物登録台帳作成などの基礎整理作業を行った。

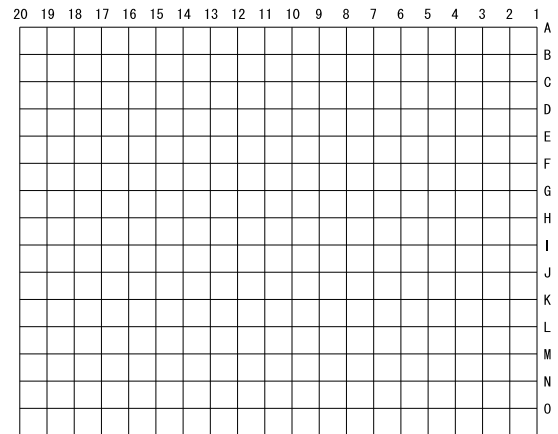
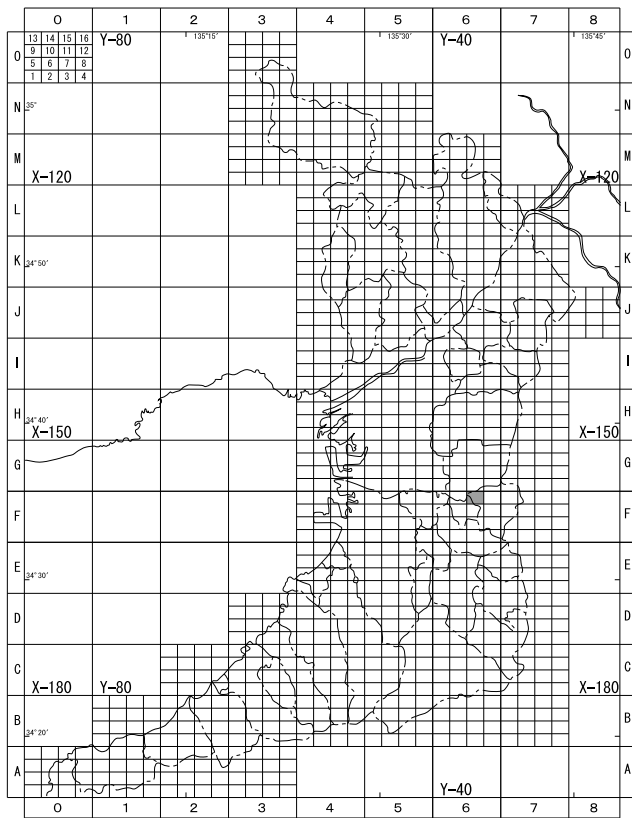
### 第2節 整理作業

発掘調査で出土した遺物は、土器・土製品・木製品などを合わせるとコンテナパッドに換算して3箱になる。この中から重要と判断されるものについて約70点を抽出し、51点を実測した。また、これらの作業に並行して、報告書刊行後の遺物管理を行うため、FileMaker社のFileMakerPro8.0を用いて遺物データベース(ピック・アップ台帳)を作成した上で収納を行った。

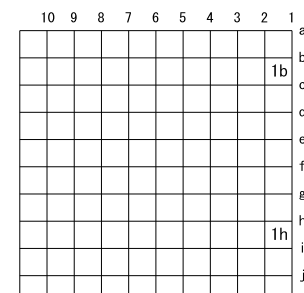
報告書掲載の挿図類は、遺構図・遺物図ともにAdobe社のWindows版PhotoshopCS5を用いて図面の合成・調整を行い、同社のIllustratorCS5を用いてトレース作業を行う手順によって作成している。

写真図版に関しては、フィルムをスキャナーを用いてデジタルデータ化し、Adobe社のInDesignCS5.5を用いて作成・編集を行った。

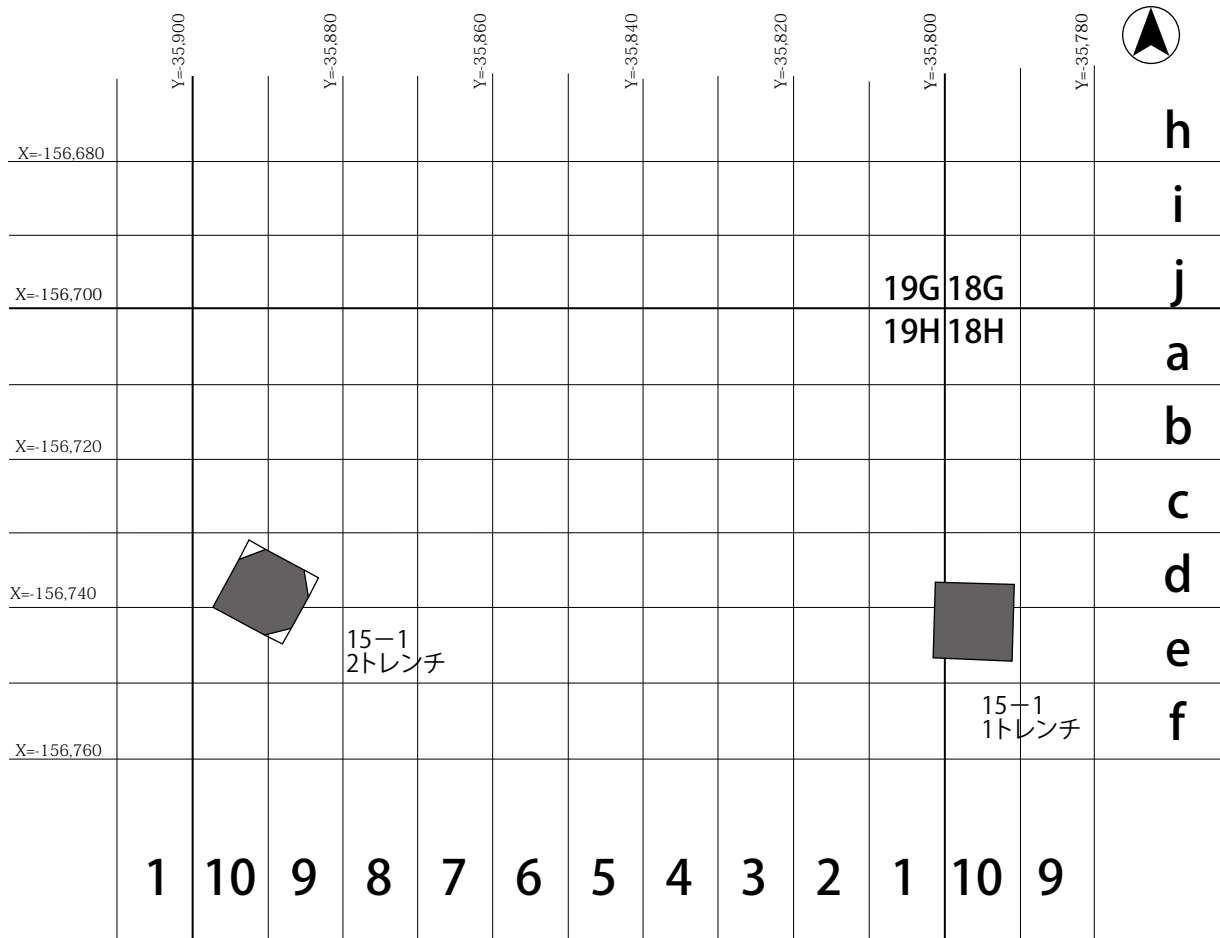
なお、報告書作成および編集は、Adobe社のInDesignCS5.5を用いて作業を行った。



第III区画



第IV区画 区画名→右上(北東)隣のポイント



第5図 地区割図

## 第4章 調査成果

### 第1節 基本層序

#### 1.1 トレンチ（第7図、図版6-1）

現地表から-4m近くまで現代の攪乱が著しく、材木・アスファルト・コンクリート・石材等の大・小の大量の廃材が埋土から確認されたが、この土の中から土師器・須恵器等の遺物が出土している。

遺構面が存在する層は確認できなかったが、トレンチの東端で-3.7mから-3.8mに7.5GY4/1・10GY4/1～6/1 暗緑灰色砂～緑灰色砂礫（極小礫～小礫）、北端・南端で2.5GY5/1・5GY4/1～5/1 オリーブ灰色・暗オリーブ灰色～オリーブ灰色砂礫層を確認した。トレンチ中央の下層確認でも-4mから-4.5m（掘削限界）は砂礫層であった。遺物が出土していないので時代は不明である。

#### 2.2 トレンチ（第6図、図版5）

基本層序は大きく12層に分けられ、第0層・攪乱・盛土・第1層：中世～近世、第2・3層：中世、4層：古代～中世、第5・6・7層：古代、第8・9・10・11層：時期不明である。

第0層は現代の攪乱、盛土層である。

第1層は3層に大別できる。第1-1層は青灰色粘土質シルトに極小礫・極粗砂・粗砂が多く混入する。にぶい黄橙色～明黄褐色をおびる層で、トレンチの南西部で厚く堆積する。上面は北側に比べてやや高くなる。第1-2層は緑灰色～暗緑灰色シルト～細砂と灰白色～灰黄色粗砂・極小礫の混合の層で、北半部で薄くなり、上面は低くなる。第1-3層は作土層で、黄灰色～灰色粗砂～極小礫・小礫・中礫の混合層で、下位は小礫・中礫が少なくなる層である。

第2層は灰色～暗緑灰色シルトに極小礫・粗砂が多く混入する粘性の砂質土である。遺構面には足跡が多く残されているが、流水の影響による凹凸が著しい。

第3層は粘性の強い緑灰色粘土質シルト（炭酸カルシウム混）で、厚く堆積し、下位は暗青灰色細砂～極細砂が薄く堆積している。なお第3層の上位では凹凸が激しく、地震による変形構造が確認できる。

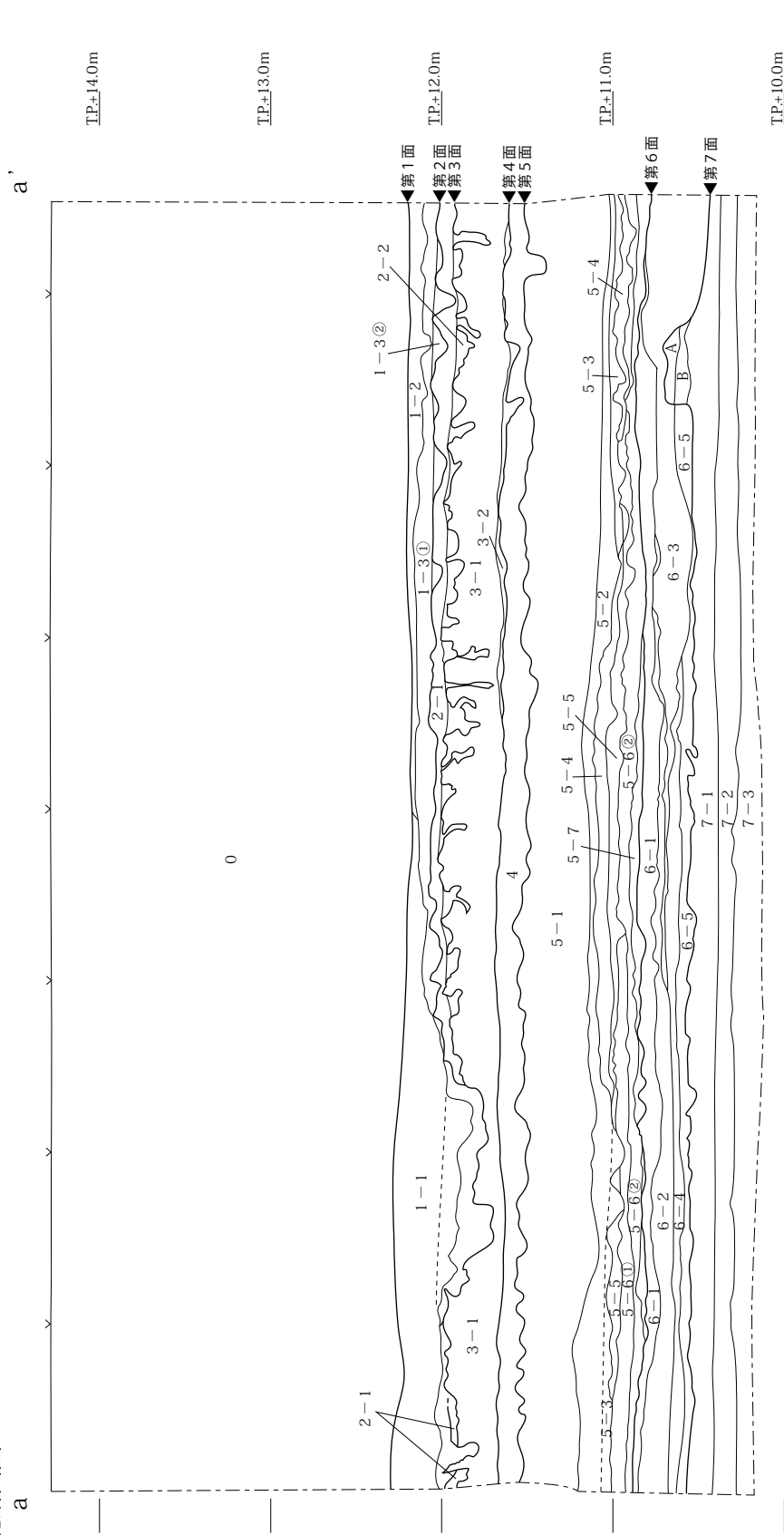
第4層は暗褐色～暗オリーブ褐色をおびる黄灰色～灰色粘土質シルトである。上面は水田面で畦畔・足跡が確認できる。

第5層は大きく7層に分かれる。第5-1層は暗褐色～暗オリーブ褐色をおびる灰色～黄灰色シルト質粘土（粘性強）である。地震痕跡が認められる。第5-2層～第5-7層は灰色ないしは灰色～灰オリーブ色シルトおよびシルト質の微砂と、灰白色～灰色粗砂～細砂・極細砂、灰色～灰オリーブ色微砂、灰白色細砂～極細砂、浅黄色～明黄褐色・黄橙色極小礫～極粗砂の互層である。流水堆積層である。

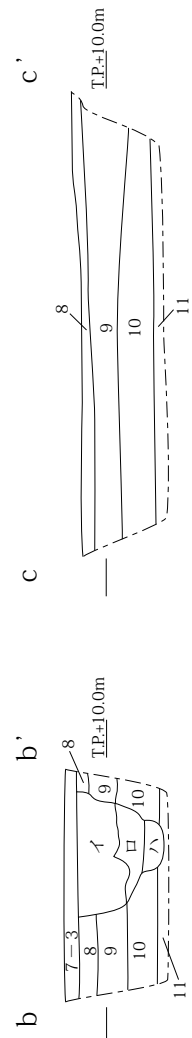
第6層は大きく5層に分けられる。第6-1層は暗オリーブ灰色シルトで極細砂～粗砂・微礫・極小礫が多く混入し、土壌化している。上面では畦畔・足跡が残る。下位は上位よりも砂礫が多い。第6-2層～第6-5層は流水堆積層である。第6-2層・第6-3層は極粗砂・粗砂・極小礫・微礫で、第6-4層は粗砂～微砂、第6-5層は上位が細砂～微砂、下位が細砂～シルトである。なお、第6-3層・第6-4層はラミナが認められる。

第7層は大きく3層に分けられ、ほぼ水平堆積である。第7-1層・第7-2層はオリーブ黒色粘土質シルトで粘性が強い。これらの層からは土師器・須恵器・木製品が出土する。第7-1層の上位には暗緑

南北断面図



下層確認トレンチ断面図



第6図 2トレンチ 断面図

第0層	盛土・攪乱
第1-1層	5B6/1~10BG5/1 青灰(10YR6/4~6/6 にぶい黄橙~明黄褐おびる) 粘土質シルトに極小礫・極粗砂・粗砂が多く混入。粘砂質土的。
第1-2層	5G4/1~5/1 緑灰~暗緑灰 シルト~細砂と2.5Y7/1~7/2 灰白~灰黄 粗砂・極小礫の混合。
第1-3層①	2.5Y6/1~5Y6/1 黄灰~灰 粗砂~極小礫・小礫・中礫。
第1-3層②	2.5Y8/2~7/2 灰白~灰黄 粗砂・中砂・極小礫・小礫。
第2-1層	2.5GY4/1~7.5GY4/1 灰~暗緑灰 シルトに極小礫・粗砂多く混入。粘砂質土的。
第2-2層	第2-1層と同色。粗砂~中砂・細砂・微砂。
第3-1層	10G6/1~5BG6/1 緑灰 粘土質シルト(粘性強) 炭酸カルシウム含む。地震痕跡。
第3-2層	5B7/1~10BG7/1 明青灰 細砂~極細砂 (ラミナ有り)
第4層	2.5Y5/1~5Y5/1 黄灰~灰 粘土質シルト。10YR3/3~2.5Y3/3 暗褐~暗オリーブ褐おびる。
第5-1層	5Y5/1~2.5Y5/1 灰~黄灰 シルト質粘土(粘性強) 地震痕跡。10YR3/3~2.5Y3/3 暗褐~暗オリーブ褐おびる。
第5-2層	5Y4/1~7.5Y4/1 灰 シルト(粘性強)
第5-3層	5Y4/1~4/2 灰~灰オリーブ シルト(細砂~微砂混入) 腐植物混入。
第5-4層	N7/0~7.5Y6/1 灰白~灰 粗砂~細砂・極細砂 (ラミナ有り。腐植物・木混入)
第5-5層	上位 5Y4/1~4/2 灰~灰オリーブ 微砂 (シルト質) 下位 2.5Y7/1~N7/1 灰白 細砂~極細砂
第5-6層①	5Y4/1~2.5Y4/1 灰~黄灰 シルト。2.5GY7/1 明オリーブ灰 微砂混入。
第5-6層②	10Y6/1 灰 細砂。
第5-7層	2.5Y7/3~7/6 浅黄~明黄褐。10YR7/6 黄橙 極小礫~極粗砂。
第6-1層	5GY4/1~5/1 暗オリーブ灰 シルト(極細砂~粗砂・微礫・極小礫多く混入) 上位砂礫多し。下位上位よりも砂礫多し。
第6-2層	2.5GY6/1~5GY6/1 オリーブ灰(やや5GY6/1 緑灰おびる) 極粗砂・粗砂・細砂。
第6-3層	5Y7/3~7/1 浅黄~灰白 極小礫・微礫・粗砂 (ラミナ有り)
第6-4層	5Y7/3~7/1 浅黄~灰白 粗砂・細砂・微砂(やや粘性気味) (ラミナ有り)
第6-5層	上位10GY7/1~6/1 明緑灰~緑灰(やや2.5Y6/1 黄灰おびる) 細砂~微砂。 下位10GY6/1~5G5/1 緑灰 細砂・極細砂・シルト。
第7-1層	7.5Y3/2~3/1 オリーブ黒(2.5Y3/2 黒褐おびる) 粘土質シルト。粘性強。上位7.5GY4/1 暗緑灰 極細砂・微砂混入。腐植物混入。地震痕跡。
A	2.5GY5/1~7.5Y5/1 灰白~灰 シルト(やや粘土質。粘性強。細砂・微砂・極小礫混入)
B	2.5GY4/1~7.5Y4/1 暗オリーブ灰~灰(2.5Y4/2 暗灰黄おびる) 粘土質シルト。微砂・細砂混入。
第7-2層	5Y3/2~7.5Y3/2 オリーブ黒 粘土質シルト(第7-1層よりも粘性強) 炭酸カルシウム・腐植物多く混入。
第7-3層	5Y4/1~2.5Y4/1 灰~黄灰 粘土(ややシルト質) 炭酸カルシウム・腐植物混入。
第8層	10YR3/1~3/2 黒褐 粘土
第9層	2.5GY4/1~5GY4/1 暗オリーブ灰 粘土(炭化物多く混入)
第10層	10YR2/1 黒 粘土
第11層	2.5G5/1 オリーブ灰 粘土
イ	7.5Y4/1 灰 粘土(黒色粘土混入)
ロ	7.5GY5/1~5GY5/1 緑灰~オリーブ灰 粘土(黒色粘土混入)
ハ	2.5Y2/1 黒 粘土(2.5GY5/1 オリーブ灰 粘土粒多い為10G2/1 緑黒おびる)

灰色極細砂・微砂が混入する。上面では畦畔・足跡が確認できる。第7-3層は灰色~黄灰色粘土で、炭酸カルシウム・腐植物が混入する。

第7層以下の層は掘削深度が現地表面から-4mに達したので、下層確認の為に、調査区中央に長さ2.5m、幅1.2m、深さ0.5mのトレンチを南北に入れた。その結果4層を確認した。

第8層は黒褐色粘土、第9層は暗オリーブ灰色粘土(炭化物多く混入)、第10層は黒色粘土、第11層はオリーブ灰色粘土層である。第8層から第11層では、人為的な遺構や遺物は出土していない。第8層の上面で径0.6~0.7m、深さ0.45~0.5mを測る風倒木痕を確認した。

## 第2節 検出遺構と遺物

### 1.1 トレンチ

本トレンチでは遺構は確認できなかったが、攪乱土中より陶器・瓦・土師器・須恵器等の遺物が出土している。土師器は皿・高杯杯部・甕・甑把手など(第7図1~10)が、須恵器は甕・杯蓋(第7図11・12)などがある。3は内面に放射状暗文を施している。6・9は底部外面に指押えの痕跡がある。

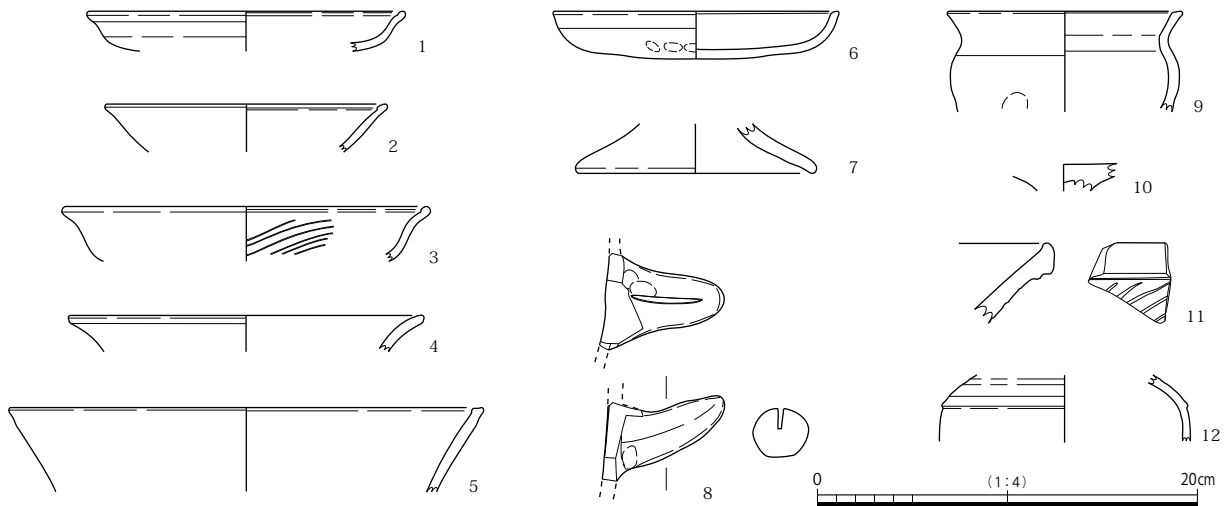
### 2.2 トレンチ

本トレンチでは東半部に現代の攪乱によって、第1面から第5面まで大きく壊されており、またトレンチ中央にも試掘トレンチが地表面から第7面までおよんでいた。面としては7面、そのうち遺構の存在する面は、第1・2・4・6・7面の5面である。

#### (1) 第1面(第8図、図版1-1)

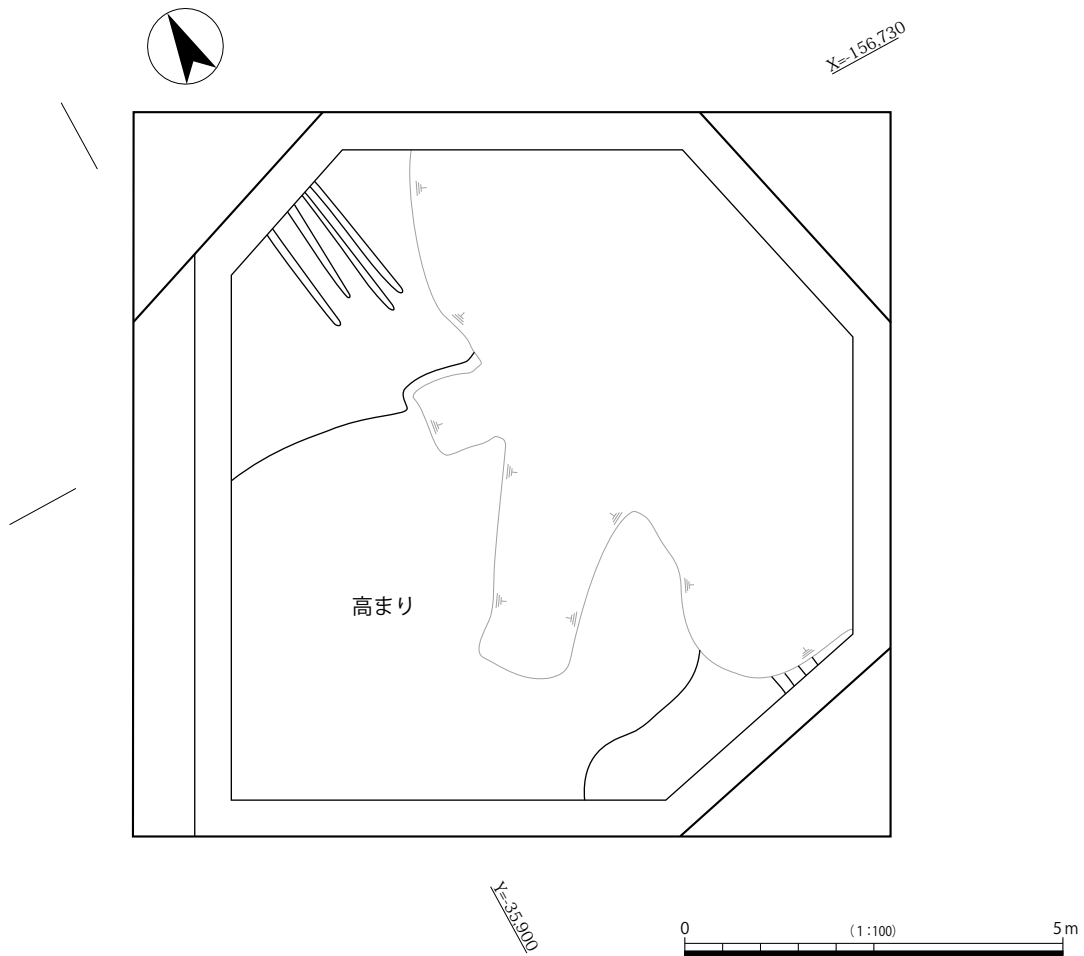
第1面はトレンチの西が高く、北端と南端が低く、T.P.+12.37m~T.P.+12.16mを測り、その差は約0.2mである。

遺構としては、高まりと鋤溝を検出した。高まりは調査区外へ延びている。鋤溝は北端で4条、南端で2条を検出した。溝の幅は約0.1~0.2m、深さ0.01~0.02mを測る。遺物は土師器、須恵器の細



第7図 1トレンチ 出土遺物

片が出土している。第1-1層、第1-2層、第1-3層からも土師器・黒色土器・瓦器・須恵器片が出土している（第14図・図版6-2）。14は黒色土器A類の底部。底部内面に格子状暗文を施す。15は須恵器碗の高台か。22は瓦器碗口縁部で内外面ともに暗文を施す。



第8図 2トレンチ 第1面 平面図

(2) 第2面 (第10図、図版1-2・2-1)

第2面は第1面と同様に南から北へ向って徐々に傾斜し、北側が低くなる。高低差は約0.3mである。

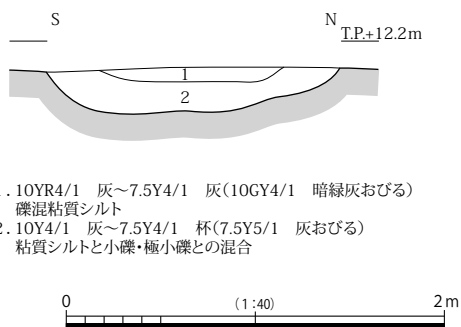
遺構としては、1溝と足跡を確認した。1溝は東側が攪乱によって壊され、西は調査区外へ延びる。規模は長さ4.4m以上、幅1.52m、深さ0.25m～0.3mを測り、東西方向に主軸を置く。埋土は2層に分けられ、上層では灰色粘土質シルトと小礫、極小礫との混合層で、下層では灰色(暗緑灰色おびる)粘土質シルトに極小礫、小礫が混じる層である。溝からは土器20が出土している(第14図、図版6-2)。瓦器碗の底部で内面に暗文を施す。足跡は人間、動物である。他の出土遺物は土師器・瓦器・須恵器片がある(第14図、図版6-2)。21・22は第2-1層からの出土で、21は土師器高杯脚部、22は瓦器碗口縁部で内外面に暗文を施す。

(3) 第3面 (図版2-2・3-1)

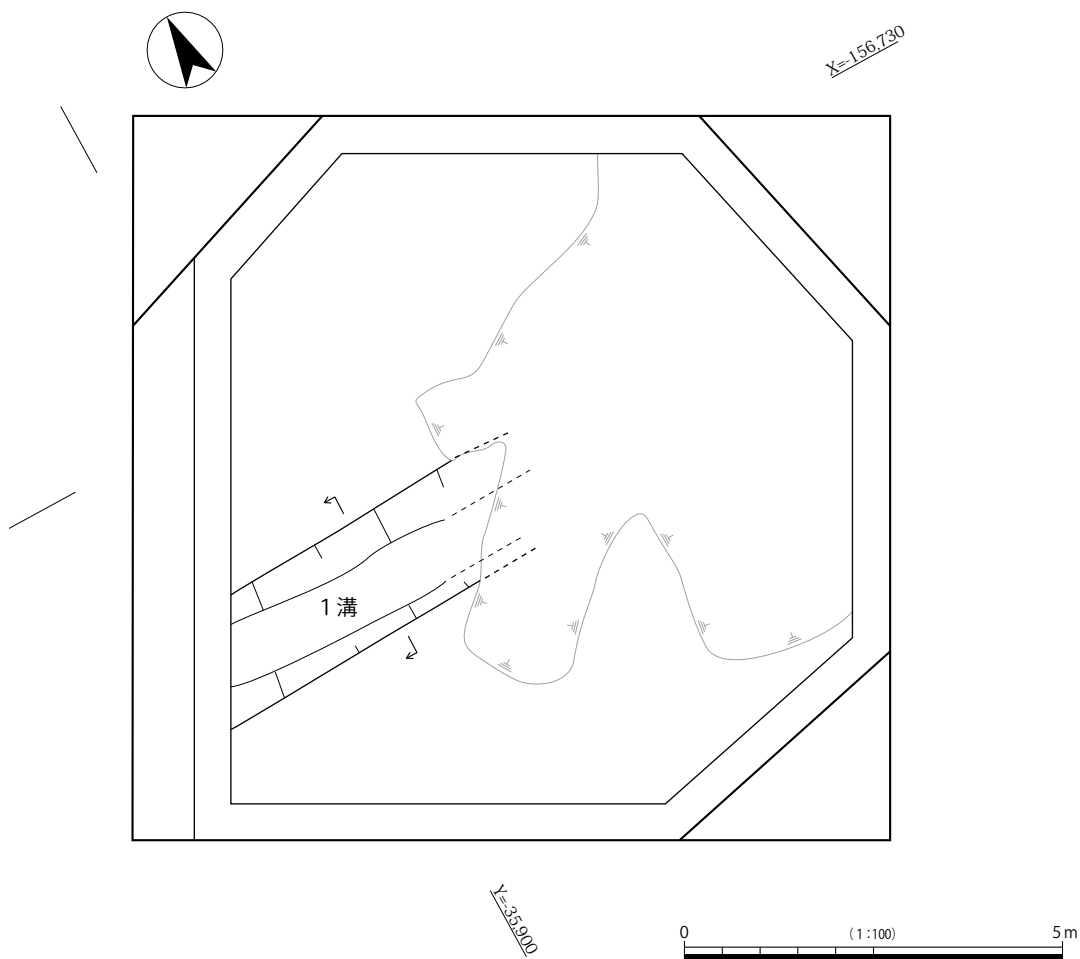
第3面は上層の砂が面に入り込み、凹凸が激しい。下層の第3-1層では地震による変形構造が見られる。

遺構は人間と動物の足跡のみで、顕著な遺構はない。

第3面での出土遺物は少ないが、下層の第3-1層では土師器・瓦器・須恵器片が多く出土している(第14図、



第9図 2トレンチ 1溝 断面図



第10図 2トレンチ 第2面 平面図



図版7-1)。器種は皿・羽釜・椀・甕か壺である。19・24～26・29は土師器皿である。27は瓦器小皿で口縁部内面と底部内面に暗文、底部外面に指押えを残す。28は瓦器椀底部である。30は黒色土器B類である。他の遺物としては、第3-2層で桃の種子(図版8-2-53)が出土している。

(4) 第4面(第11図、図版3-2)

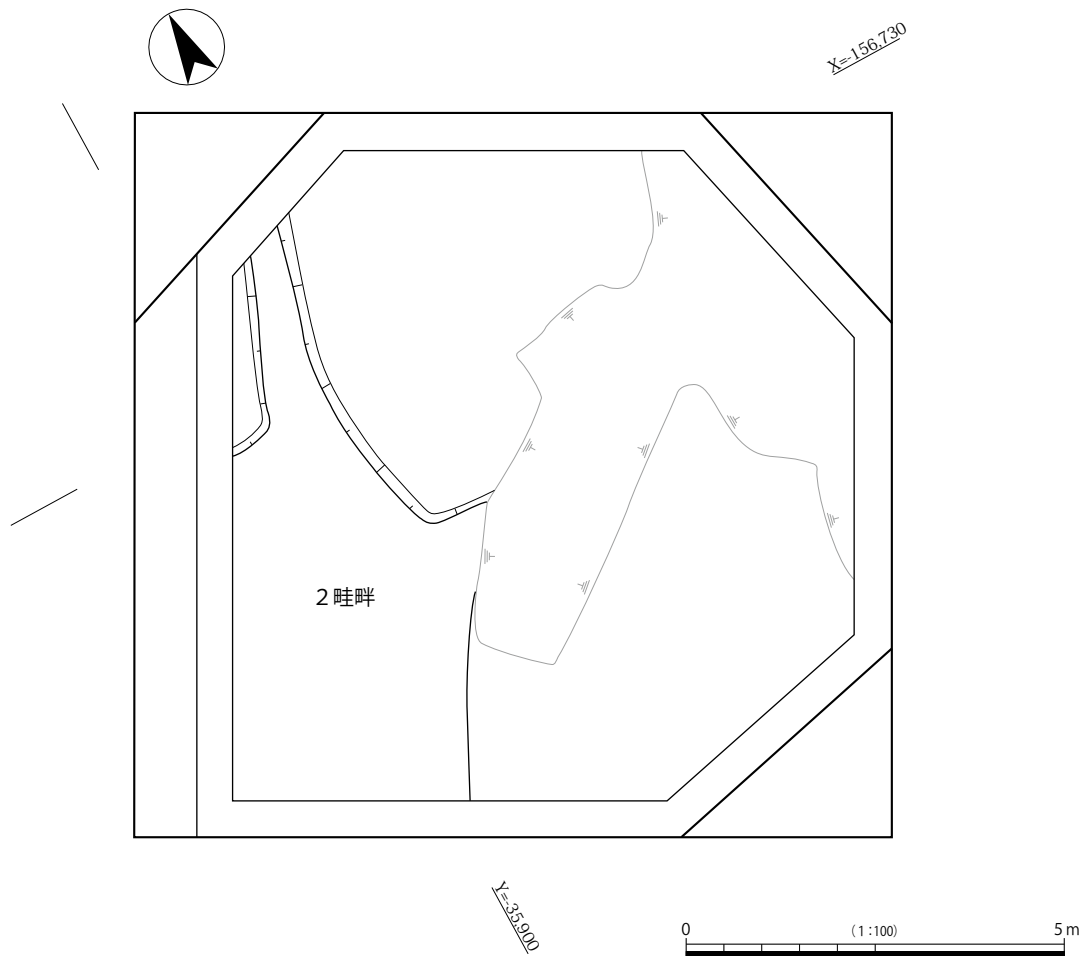
第4面は北半部において、第3-2層の明青灰色細砂～極細砂を除去すると検出される。南から北に向って若干傾斜し、北端が低くなる。その差は約0.1mである。遺構としては2畦畔がある。調査区の西端に位置する。残存状況は北半で特に良好である。

畦畔の主軸は、ほぼ南北方向に置く。長さは約4.5m、幅(下場)0.7m～1.1m、高さは0.05m～0.1mである。畦畔は北側で調査区外へ延び、畦畔の西側の辺が北端から2.2mの箇所まで西に折れ、調査区外へ延びる。東側の辺は北端から約4.5mの箇所まで東側の試掘トレンチへ延びる。本畦畔の南半部では、畦畔のない東半部に比べて遺構面はやや高い。

遺物は、土師器・黒色土器(第14図31・図版7-2)が出土している。31は黒色土器A類で、体部内外面と底部内面にヘラ磨きによる暗文を施し、高台は横ナデを施している。

(5) 第5面

第5面では、地震による変形構造を確認したが、遺構は検出できなかった。遺構面は、南側が高く、北へ向って徐々に傾斜しており、高低差は約0.1mである。遺物は土師器・須恵器片が出土している(第



第11図 2トレンチ 第4面 平面図

14 図・図版 7-2)。土師器は第 5-2 層～第 5-4 層で高杯の破片 2 点 32・33 が、第 5-5 層で小型の鉢 34 が出土している。34 は口縁端部に丸味を有し、底部は丸く成す。口縁部外面はヨコナデを、体部外面は板ナデを施す。内面は全体的にヨコナデを行う。

(6) 第 6 面 (第 12 図・図版 4-1)

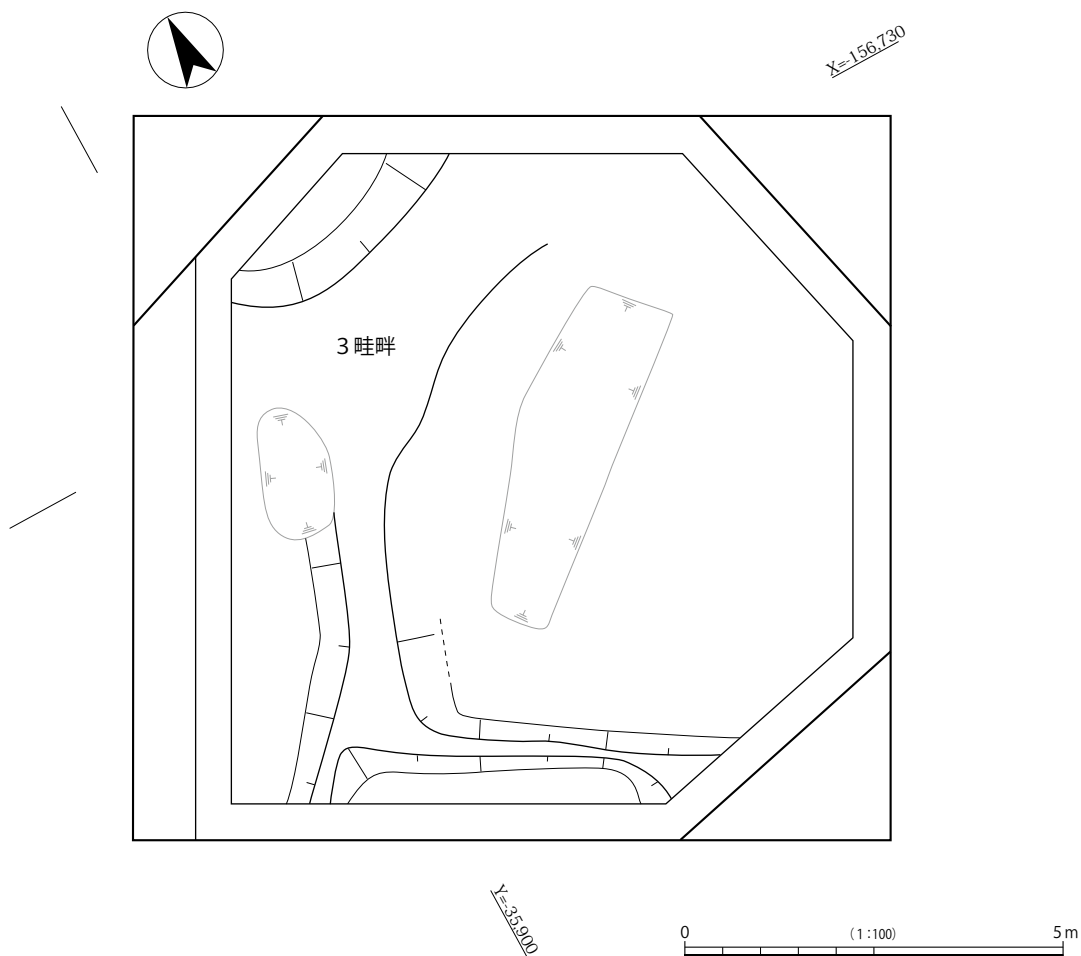
第 6 面は第 6-1 層・第 6-3 層を基層とする。第 7 面までは第 6-2 層～第 6-5 層が堆積している。第 6-1 層は極細砂～粗砂・微礫・極小礫が多く混じる暗オリーブ灰色シルトで、土壌化している層である。第 6-2 層～第 6-5 層は極粗砂・粗砂・細砂～極細砂・極細砂・シルトで、第 6-3 層・第 6-4 層は浅黄色～灰白色極小礫～微砂で、ラミナを有する。第 6 面は第 5-6 ②層細砂・第 5-7 層粗砂を除去すると検出される。

遺構としては、調査区の西半部で 3 畦畔と足跡を検出した。畦畔は上層の砂礫を除去して検出される。

3 畦畔は、南北に走行する不整な Y 字形の畦畔に、南端で東西方向の畦畔と接する。規模は南北の長さ 8.5 m、幅(上場)は北端で 1.7 m、中央で 0.5 m～0.7 m、南端で 0.3 m を測る。高さは北端で 0.06 m、中央で 0.04 m、南端で 0.1 m を測る。東西の畦畔の規模は長さ 4 m～4.7 m、幅 0.15 m～0.3 m、高さ 0.03 m～0.07 m を測る。

足跡は畦畔周辺で多く検出されるが、東側の水田面では少なくなる。

出土遺物としては、土師器・須恵器の破片・木製品・木実・種子がある (第 14 図、図版 8-1・8



第 12 図 2 トレンチ 第 6 面 平面図

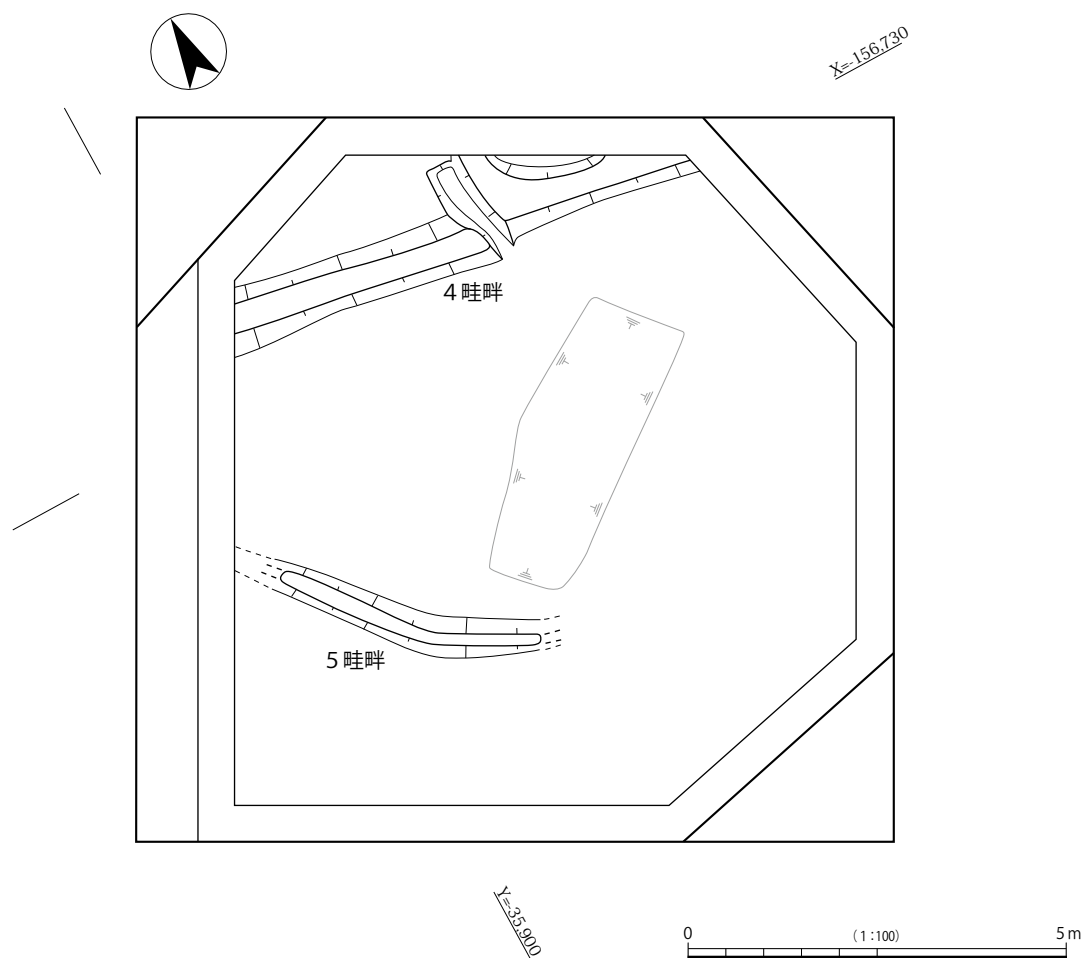
－2・9－1・10－1)。35は土師器皿、47・48は土師器甕である。36は須恵器甕の口縁部である。40・41は木製品である。40は杭で先端部を加工している。41は一端が焼けている。57は木実の松笠、56は桃の種子である。

(7) 第7面 (第13図・図版4－2)

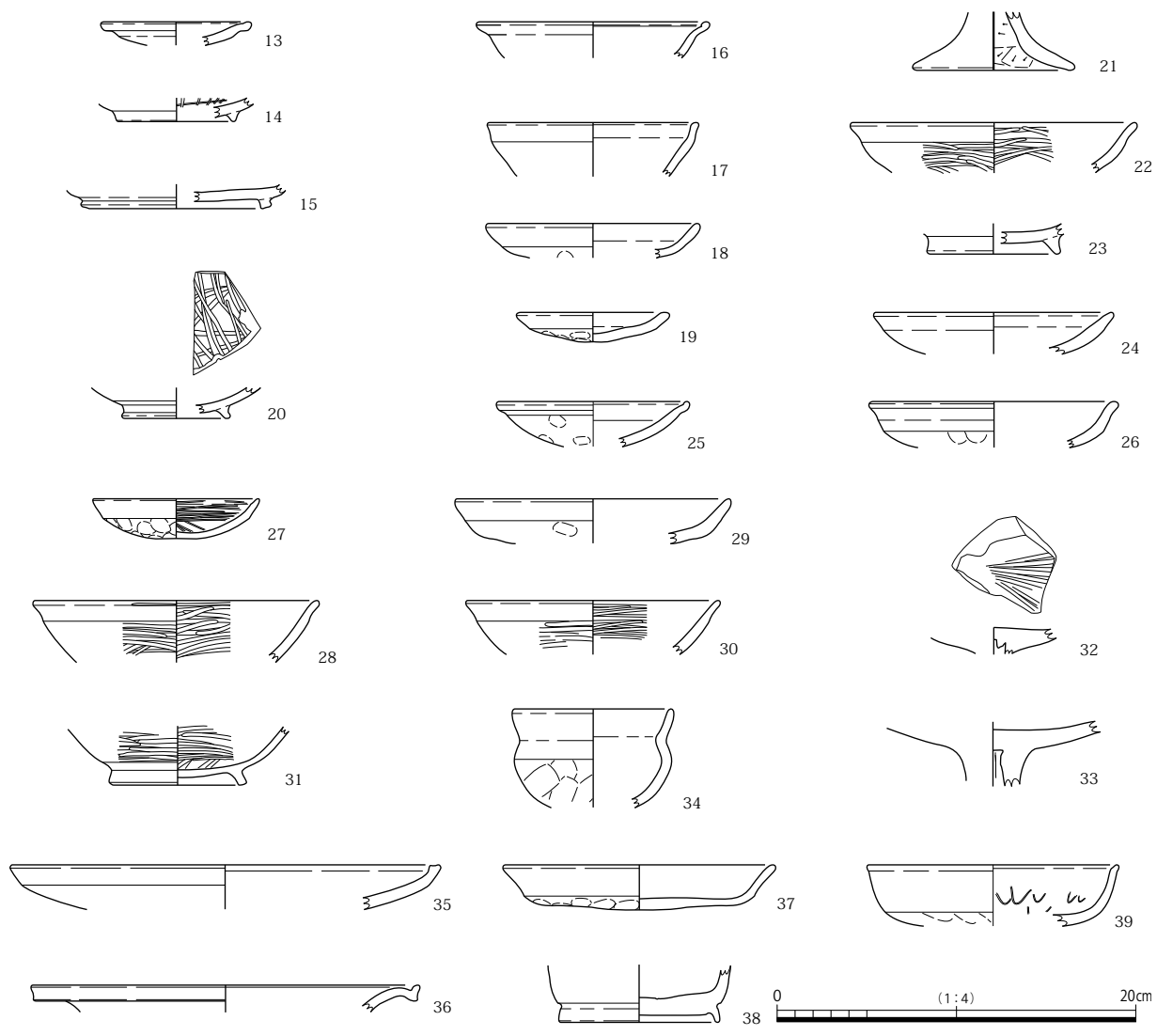
第7面は第6－3層・第6－5層を除去して検出され、第7－1層を基層とする。第7－1層・第7－2層はオリーブ黒色粘土質シルトで、腐植物が混入する。第7－1層は極細砂・微砂が、第7－2層は炭酸カルシウムが混入する。第7－1層上面では地震による変形構造を確認できる。

遺構としては、2条の畦畔と足跡を検出した。畦畔は4畦畔と5畦畔である。4畦畔は調査区の北端に位置し、主軸をほぼ東西方向に置き、調査区外へ延びる。畦畔の主軸は水口を挟んで西側と東側がずれている。東側の畦畔は北にも調査区外へ延びる。畦畔の長さは6.7 m、幅は0.3 m～0.38 mを測る。畦畔は土を2層(上層：A層・下層：B層)に盛り上げて造られている(第6図)。A層はやや粘土質の灰白色～灰色シルトに微砂・細砂・極小礫が混入し、B層は暗オリーブ灰色～灰色粘土質シルトで微砂・細砂が混入する。

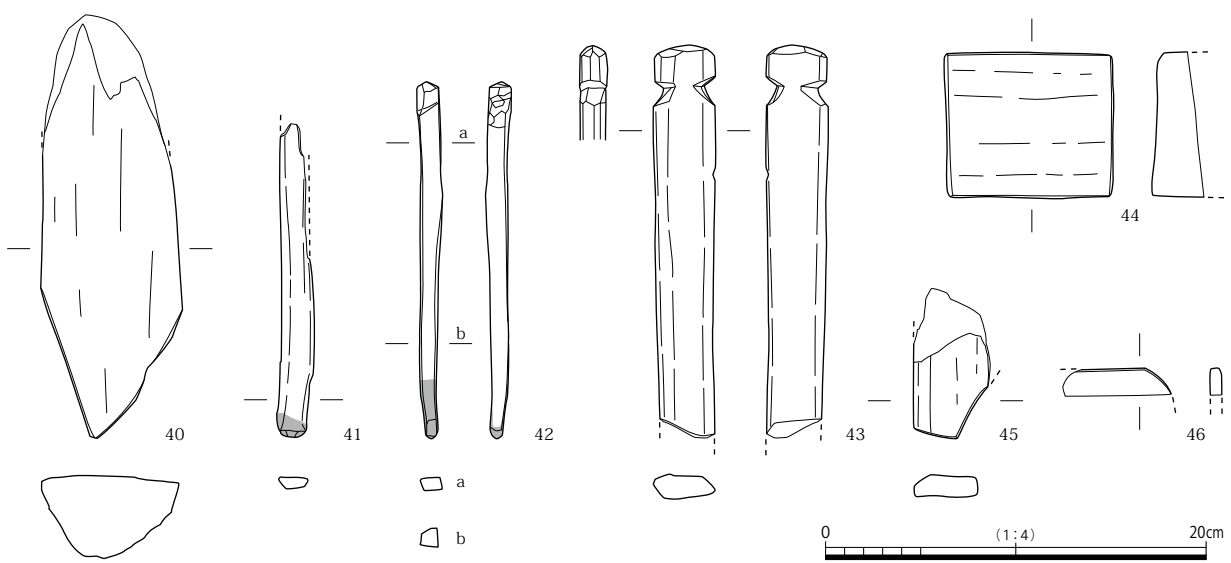
水口の幅は0.35 m～0.38 mを、深さは0.13 m～0.18 mを測る。水口の北側には長さ約0.65 m、幅約0.5 m、深さ約0.1 mの方形土坑が位置し、水口と繋がっている。水田面は、畦畔の南側が北側よりも約0.1 m～0.2 m高い。5畦畔は4畦畔の南側に約2.9 m～4.7 m離れて位置し、畦畔の主軸は北



第13図 2トレンチ 第7面 平面図



第14図 2トレンチ 出土遺物



第15図 2トレンチ 出土木製品

西―南東方向に置く。長さ 3.7 m、幅 0.4 m～0.55 m、高さ約 0.06 mを測る。本畦畔と周囲では、上層の砂礫層が多く認められ、流水によって多くの窪みが残されている。畦畔は西方の調査区外と東方へも延びていたものと思われる。また、高さももう少しあったものと推測される。

足跡は調査区全体で検出でき、畦畔の周辺では顕著である。4 畦畔では、盛土を除去した面においても足跡が残されていた。他の遺構としては、地震痕跡を確認した。調査区全体で見られるが、特に東半部で著しい。

出土遺物としては、土師器・須恵器と木製品・種子・炭化物がある（第 14・15 図、図版 8－1・8－2・9－1・10－1）。37・39 は土師器である。37 は皿で、第 7－3 層の出土である。口縁部をやや外反させ、底部内面に暗文を、底部外面に指押えを残す。39 は杯で、第 7－1 層の出土である。底部はやや丸みを有し、口縁端部をわずかに外方へつまみ上げる。内面に暗文を、外面底部は指押えを残す。38 は第 7－2 層の出土で、杯の底部である。

木製品は 42～44・46・58・59・61～63 等が第 7－1 層より出土している。42・58・59・61～63 は 41 と同様に、木の一端が焼けて炭化している。58・59 を除いて長さ・幅・厚さはおおよそ類似する。42 は表・裏・側面を全体的に丁寧な削り、焼けている箇所とは反対の先端部表裏面をさらに細かく鱗状に加工する。先端は三角形状を呈する。58・59 は欠損しており、61～63 は木を割いたものを使用したようである。60 は木が焼けた炭である。43 は第 7－1 層から出土している。現存長は 20.7 cm、幅 3.3 cm、厚さ 1.3 cm～1.5 cmを測る。表裏側面は丁寧に削られ、端部の先端と側面は丸く削られ、先端から 1.5 cm～3 cmの箇所で側面を「く」の字状に切り込みを入れ、突起状に作り出している。本遺物は破損しているため、全体の形状は不明であるが、もう一方の端部にも突起が作り出され、その厚さより織機の一部と推測される。44 は平面形を方形に、断面を台形状に呈しており、6 面を丁寧に平坦に削る。46 は一部のみ形状を残すが、全体的に円形を呈したと推測され、容器の底板もしくは蓋であったと思われる。45 は板材で、第 7－3 層から出土したものである。全長は欠損しているため不明であるが、長さ 8 cm、幅約 4 cm、厚さ約 1 cmを測る。表裏面は平坦に削り、端部は V 字状に斜めに削っている。本遺物は、V 字状の先端を下に突き刺さった状態で検出した。層は異なるが、7 面の 4 畦畔に近いことから、第 7 面時で打設されたものと推測される。

種子は 5 点（49・50・52・53・56）出土しており、全て桃である。49・53 は第 7 面、49 は 4 畦畔、52 は第 7－1 層、50・56 は第 7－1 層～第 7－2 層にかけて出土したものである。49 は他の種子よりも小さく、52 は種子の側面に孔があり、鼠等によって開けられたものと思われる。

## 第5章 総括

今回の調査では、現地表面 T.P. + 14.3 m から - 2 m までの現代の攪乱土の盛土層を機械で掘削を行った。それより下は人力掘削を行い、掘削深度の地表面下 - 4 m まで調査を行った。- 4 m から下は、下層を確認するために小トレンチを入れて、深さ 0.5 m まで調査を行った。その結果、1 トレンチでは T.P. + 10.53 ~ 10.43 m で砂礫層を確認した。2 トレンチでは 7 枚の遺構面を検出した。

2 トレンチの第 1 面は南端で T.P. + 12.3 m、北端で T.P. + 12.2 m を測り、南半部が高くなる。低い北半部はほぼ水平な面である。低い面では鋤溝が検出される。鋤溝は高い所におよんでいない。平成 25 年の調査においても、T.P. + 12.3 ~ 12.4 m で鋤溝が検出されている。

第 2 面は T.P. + 12.0 m ~ 12.08 m を測り、ほぼ水平な面である。遺構としては、溝と足跡を検出した。畦畔は検出していないが、溝は耕作に利用されたものと思われる。平成 25 年の調査では T.P. + 12.2 m 前後で 2 条の流路が確認されている。

第 3 面は北半部がやや低く、T.P. + 11.9 m 前後を測る。遺構面は洪水砂による浸食が激しく、たくさんのかみ砂が溜まっていた。また、地震によって砂が深く落ち込んでいるのを検出した。第 2 面と同様に畦畔は確認していないが、耕作面と推測される。平成 25 年の調査では、T.P. + 11.8 m の第 3 面で流路と、流路によって切られた 2 条の畦畔が検出されている。流路は洪水によって両壁面が激しく浸食され、土がブロック状に落ち込んでいる状態が確認された。2 トレンチとの距離は 175 m である。この時の洪水砂が 2 トレンチにもおよんだものと推測される。

第 4 面は T.P. + 11.6 m ~ 11.7 m を測る。遺構としては、2 畦畔がある。畦畔は調査区の西半部の北端で明瞭に残されていたが、南側では不明瞭であった。畦畔は、第 4 層の黄灰色~灰色粘土質シルトに細砂・微砂が混入する土で盛られていた。本遺構面は平成 25 年の調査の第 4 面に相当すると思われる。畦畔も同規模の 6 畦畔が検出されている。

第 5 面では地震の痕跡を確認した。土層断面では上下に波を打った状態を観察でき、平面では第 4 層の土と、第 5 - 1 層の土の境が明瞭である。地震による変形構造である。第 4 層から第 5 面にかけて、黒色土器碗 A 類の底部が出土している。また第 5 - 5 層では土師器の小型の鉢が出土している。時期はいずれも古代である。

第 6 面では畦畔と足跡を検出した。田面の高さは T.P. + 10.7 m ~ 10.8 m を測る。畦畔は西半部から南端にかけて確認した。北半部では幅が広く、南半部では幅が狭くなる。畦畔の高さは北半部で 0.05 m、南半部で 0.08 m ~ 0.1 m を測る。北半部で畦畔が低いのは洪水によって削平を受けたことと、踏み込みが激しかったことが推測される。

第 7 面は北端で T.P. + 10.43 m、南端で T.P. + 10.6 m を測る。遺構は 2 条の畦畔 (4・5 畦畔) と足跡・地震痕跡を検出した。水田面は 4 畦畔の南はほぼ水平である。4 畦畔の北側と南側では高低差約 0.16 m あり、北側が低くなる。そのために畦畔と畦畔の間に水口が設けられ、低い所へ水を流した。高い所の尻水口は、やや「ハ」の字状に広がり、水が入りやすくしている。水を取り入れる水口は広がらず、まっすぐに流れ、水口の前浅い小土坑に一旦水を落として、低い田へ入れたようである。小土坑は長さ 0.6 m、幅 0.4 m、深さ約 0.1 m を測る。土坑は砂や泥、細かい草木を一旦溜める施設とも考えられ、「置簀 (おきす)」的な機能があったものと推測される。類例として、堺市伏尾遺跡の遺構が挙

げられる。水口の前に土坑が2基存在し、乙益重隆が論じられた「置簀」的な性格を持つ同様の土坑と考えたが<sup>(1)</sup>、本土坑とは大きさ・深さなど規模が異なり、大型なものである<sup>(2)</sup>。今後の類例に期待したい。

第7面・第7-1層・第7-2層からは土器以外に種子と木製品が出土している。種子は上層よりも多く出土している。木製品も掲載した遺物以外にもあり、種子と同様に上層よりも多い。木製品の中で注目されるのは、木の一端が焼けている遺物と炭(41・42・58～63)である。木は長さが約20cmのものが主で、58・59のように長さが短いものもある。遺物は表面全体を丁寧加工したもの(42)や、表面だけ削ったもの(41・61)や、木を割ったままであまり手を入れていないもの(62・63)に分けられる。これらの焼けた木が第7面や第7-1層・第7-2層から何故出土するのであろうか。以下4点挙げてみた。

1. 木・藁・干し草などを焼いて、その灰を水田の肥料とした。その時の火を付ける付木である。
2. 家で使用した火付けのための木を水田に投棄した。
3. 「虫送り」の時に使用した。付木を何本か一つに束ねて一本の木の先端に付けて松明とし、各田畠を巡り、祭りが終ると最後に田畠へ返した。
4. 「虫送り」の行事だけでなく、水田に関わる祭事で使用した。

1・2は全く否定することはできないが、3・4を考えたい。1であれば細かい炭化物が確認されるが、炭化物は検出していない。いずれの考えにせよ、耕作面や作土層から出土する焼けた木は注意を要すると思われる。また、今回未実施であるが、樹種の鑑定も必要である。

本遺構面はT.P. + 10.4 m～10.6 mを測り、平成25年の調査の第5面に相当するものと推測される。平成25年の調査ではT.P. + 10.3 m～10.4 mを測るが、同じような規模の畦畔が1条検出されている。

以上のことから、第1面では中～近世の鋤溝、第2面では中世の溝、第4面は古代～中世の水田畦畔、第6・7面は古代の水田畦畔を検出することができた。平成25年の調査と同様に、今回の調査においても時代を通じて耕作地として利用されてきた様子が明らかになった。

(1) 乙益重隆「古代水田区画雑考」『鏡山猛先生古稀記念古代文化論考』1980. 鏡山猛先生古稀記念論文集刊行会

(2) 小野久隆「V. 伏尾遺跡の調査成果」「VII. まとめ」『大庭寺遺跡II・伏尾遺跡I—調査の概要』1992.3. 大阪文化財センター





# 写 真 图 版





1.2トレンチ 第1面 全景 (北から)



2.2トレンチ 第2面 全景 (東から)

図版2 遺構



1.2 トレンチ 第2面 1溝断面 (東から)



2.2 トレンチ 第3面 全景 (東から)



1.2トレンチ 第3面 足跡(北から)



2.2トレンチ 第4面 全景(南から)

図版4 遺構



1.2トレンチ 第6面 全景（北から）



2.2トレンチ 第7面 全景（西から）



1. 2トレンチ  
南北断面  
第1層～第5-1層  
(東から)



2. 2トレンチ  
南北断面  
第3-2層～第7層  
(東から)



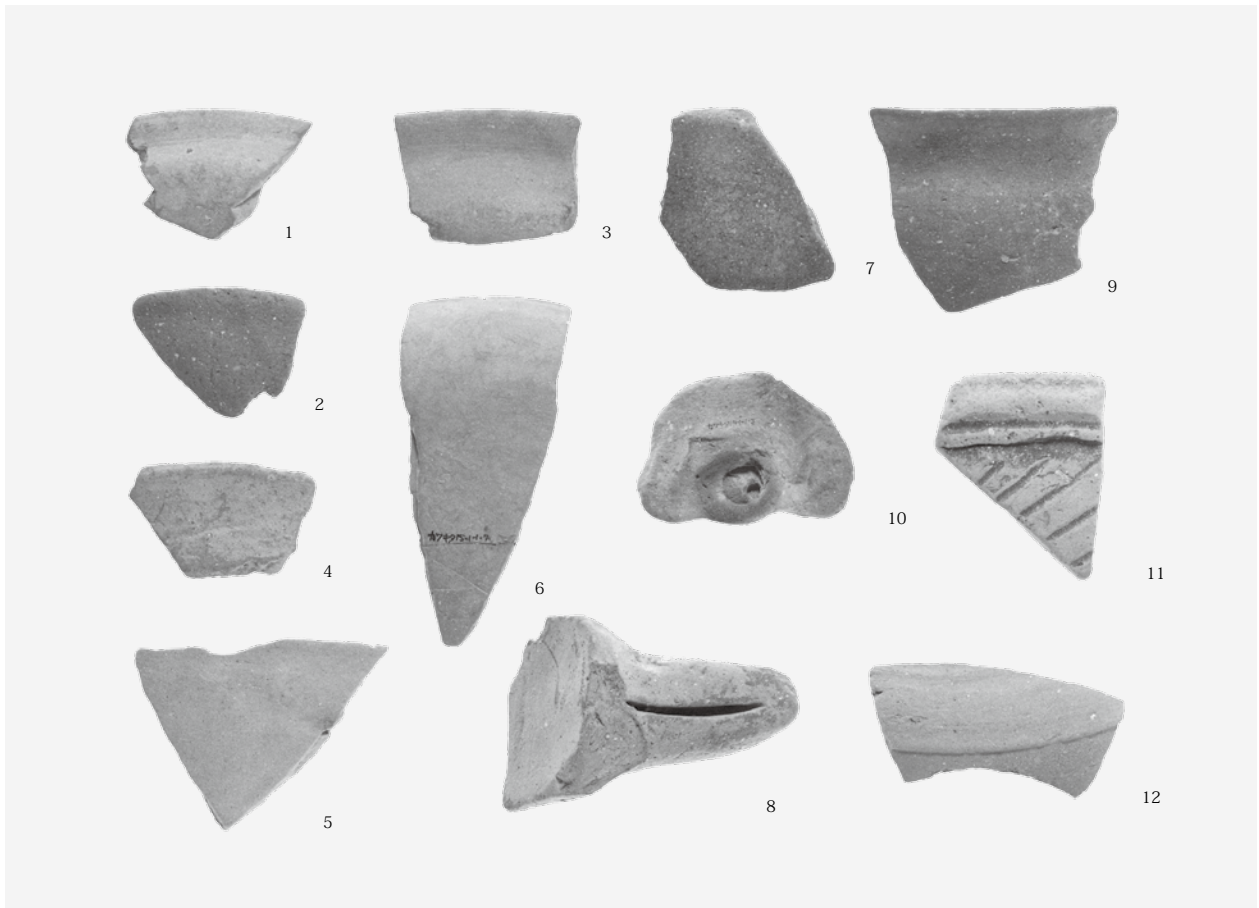
3. 2トレンチ  
南北断面  
第5-6層～第7層  
(東から)



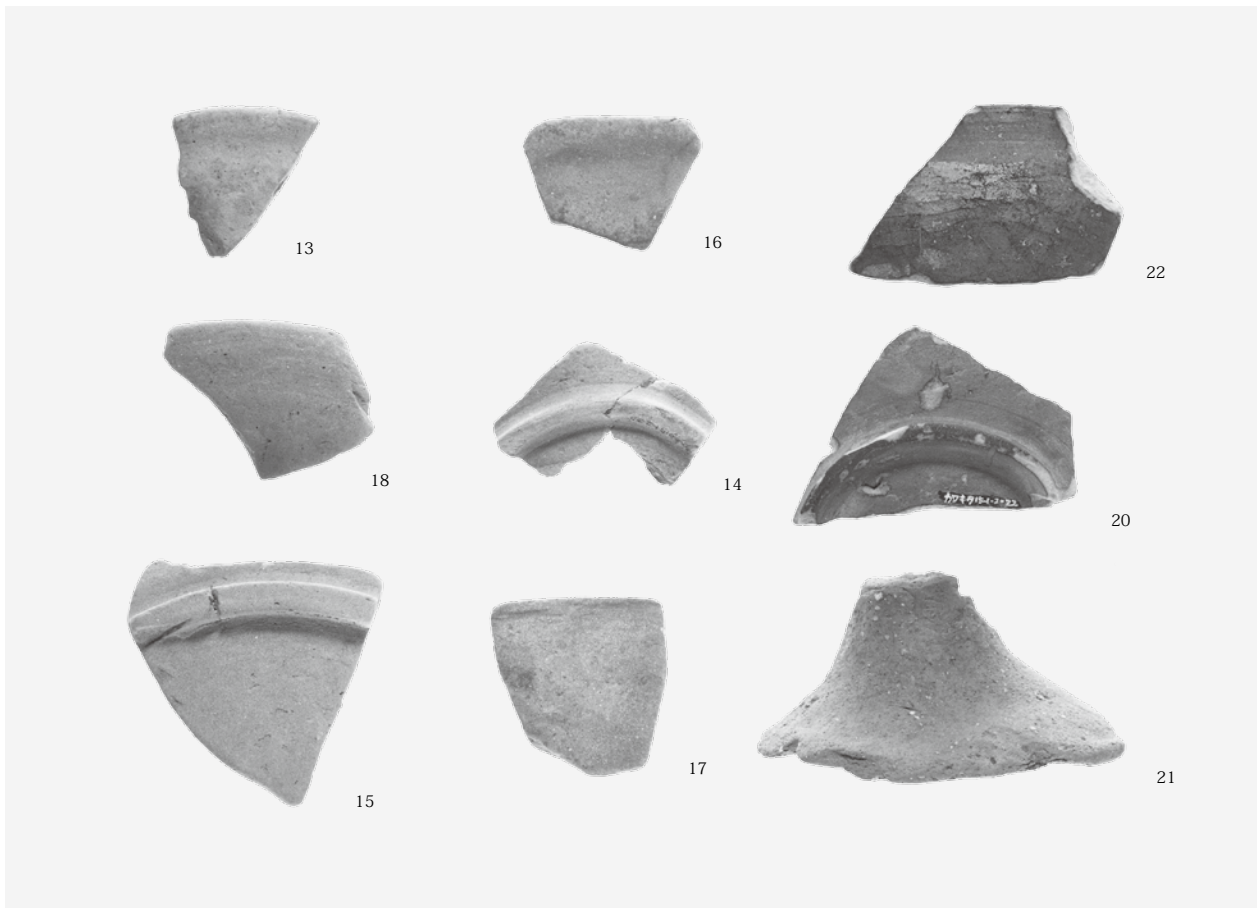
4. 2トレンチ  
下層確認トレンチ  
第8～第11層・風倒木痕  
(北から)



図版6 遺物

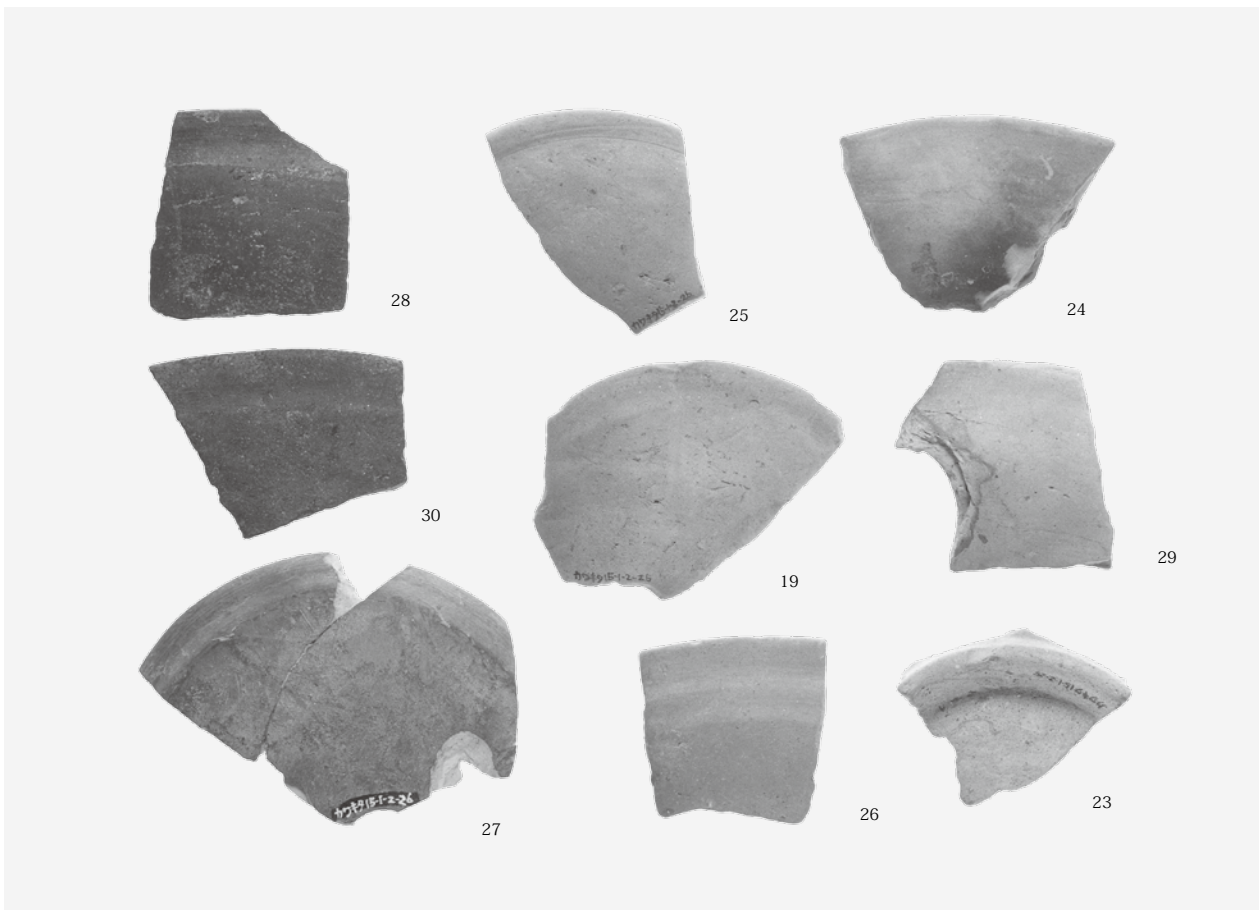


1.1 トレンチ 出土遺物

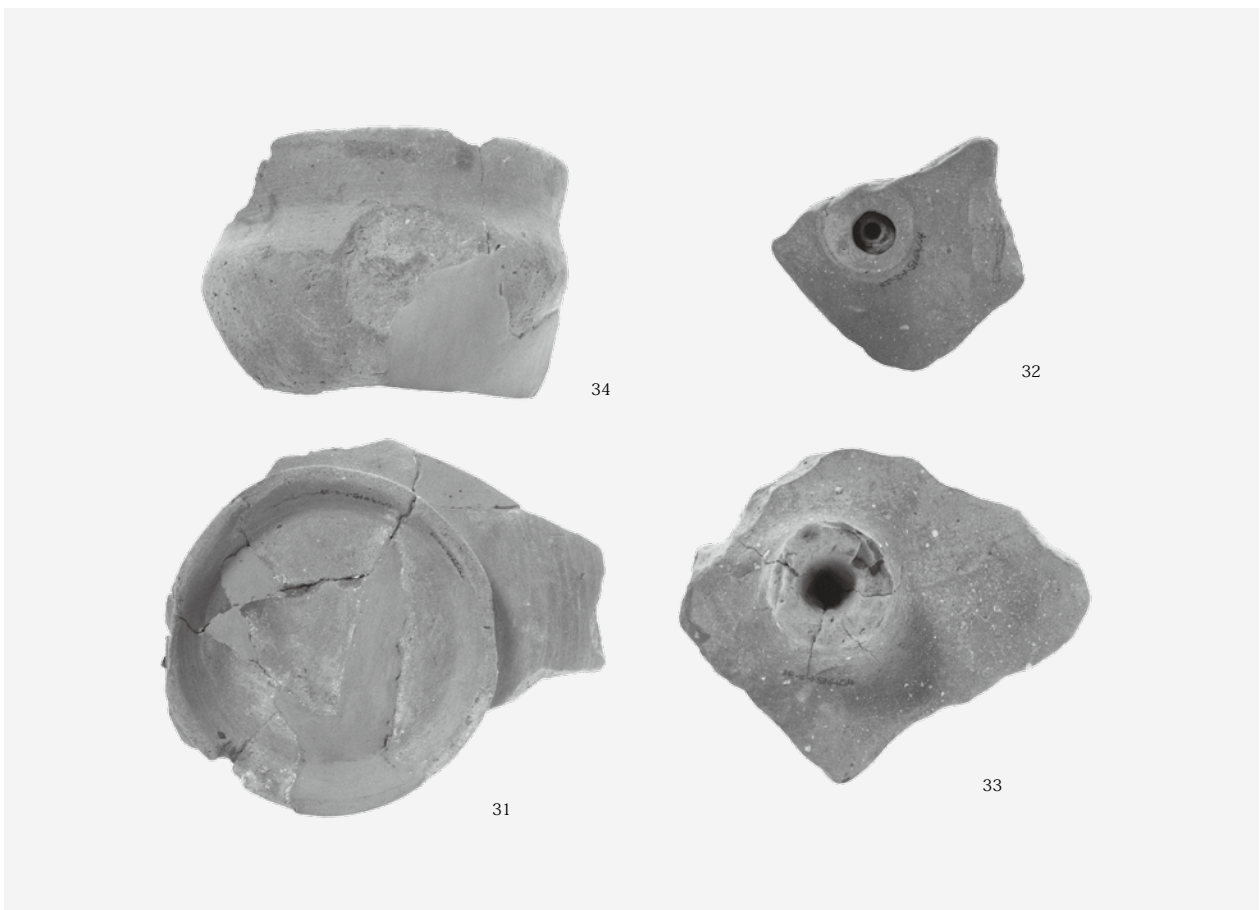


2.2 トレンチ 第1層～第2面・第2層 出土遺物



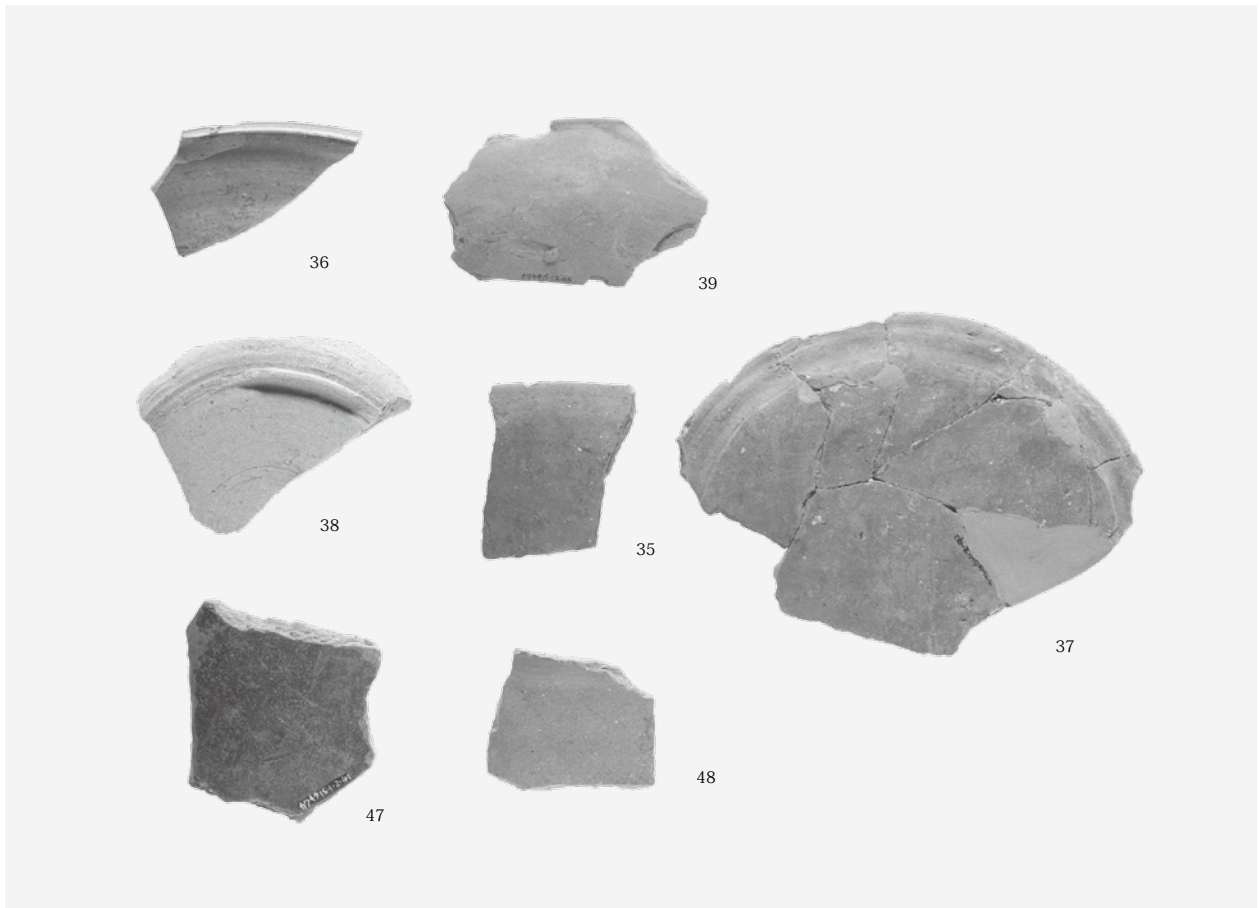


1.2トレンチ 第3層 出土遺物



2.2トレンチ 第4・5層 出土遺物

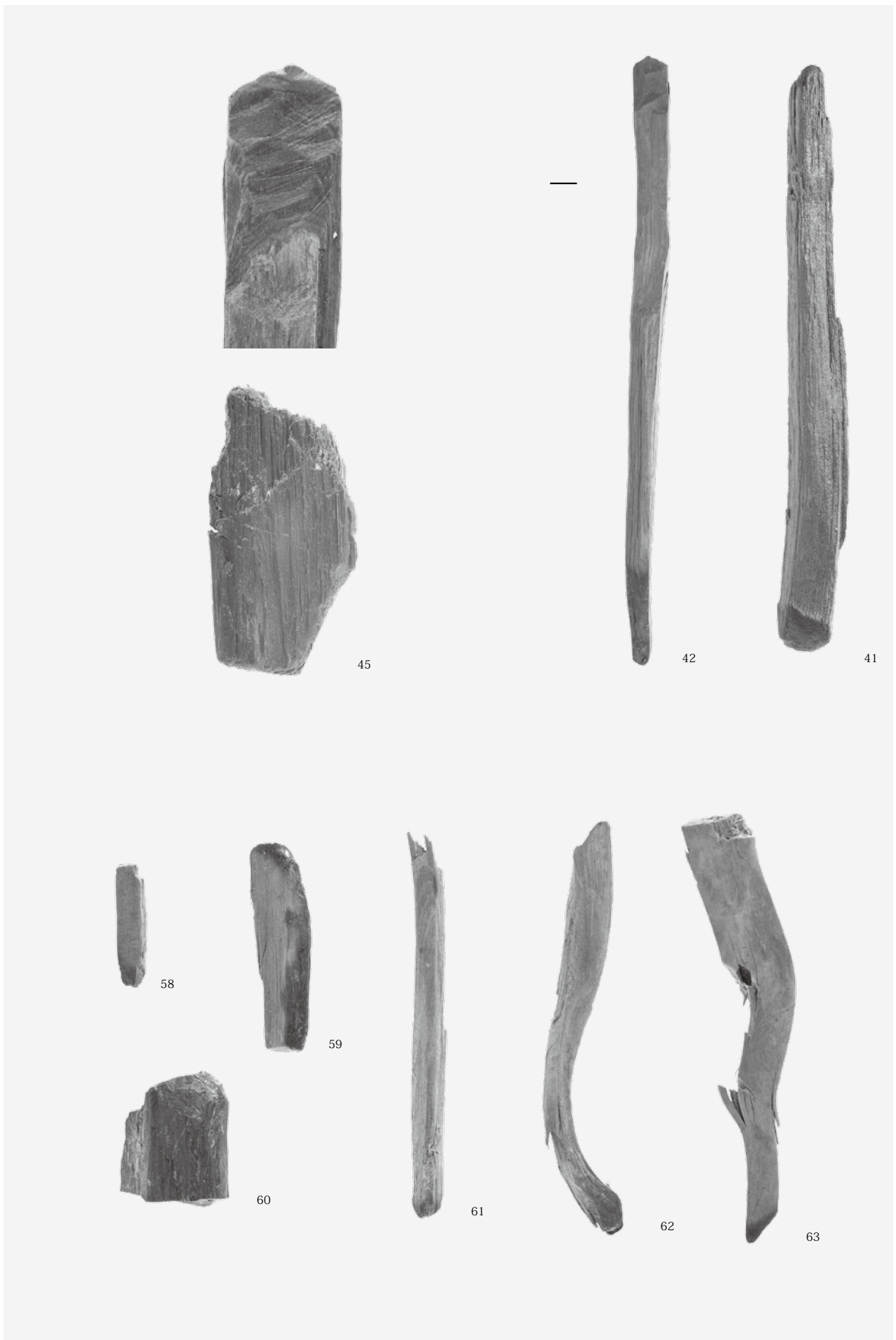
図版 8 遺物



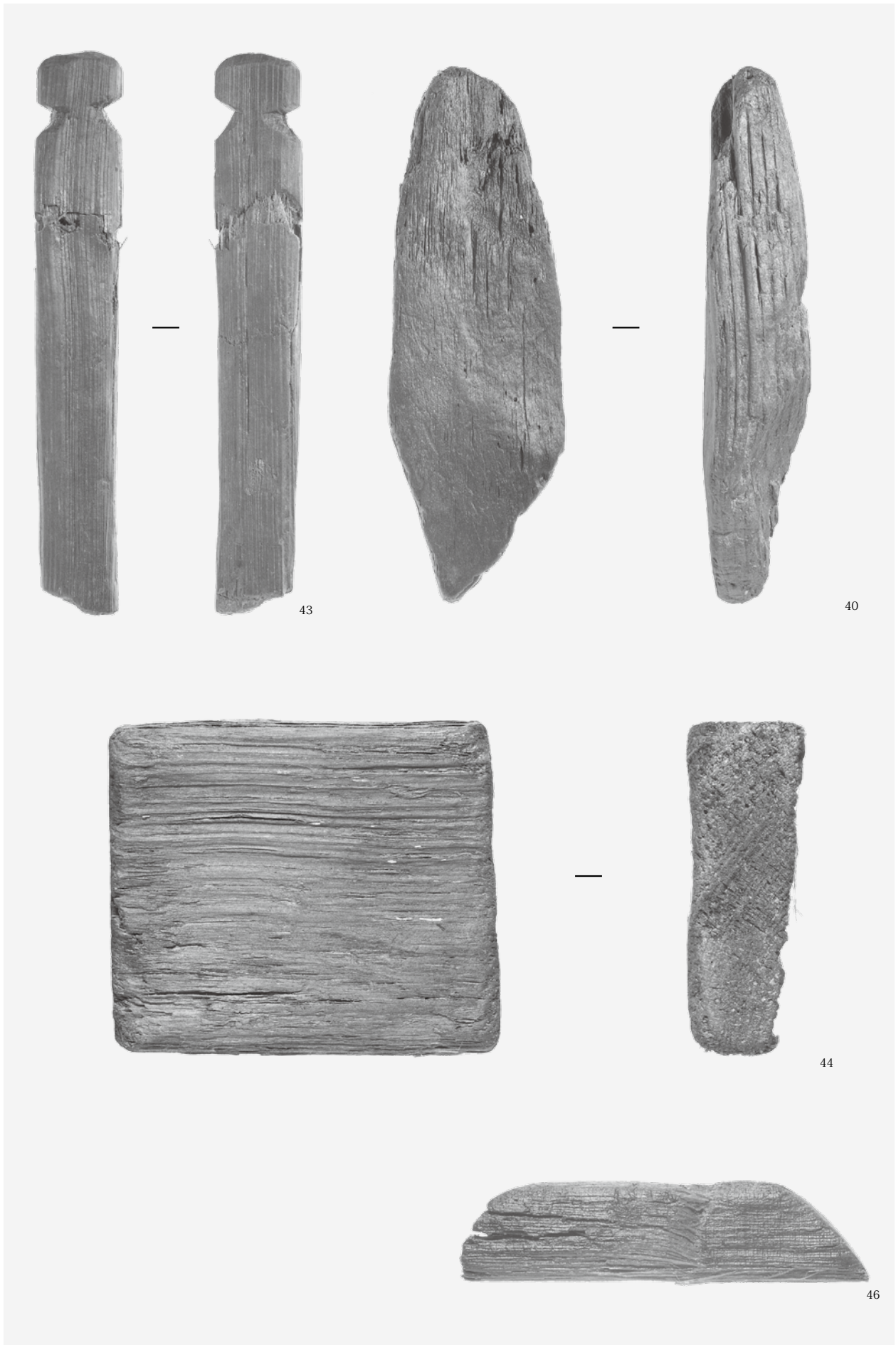
1. 2 トレンチ 第 6・7 層 出土遺物



2. 2 トレンチ 出土種子・木実



1.2トレンチ 出土木製品



1.2 トレンチ 出土木製品

# 報告書抄録

ふりがな	かわきたいせき2						
書名	川北遺跡2						
副書名	バイパス送水管（藤井寺～長吉）整備工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書						
巻次数							
シリーズ名	公益財団法人 大阪府文化財センター調査報告書						
シリーズ番号	第264集						
編著者名	小野久隆、森屋美佐子						
編集機関	公益財団法人 大阪府文化財センター						
所在地	〒590-0105 大阪府堺市南区竹城台3丁目21番4号 TEL 072-299-8791						
発行年月日	2016年2月29日						
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		緯度・経度	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号			(㎡)	
かわきたいせき 川北遺跡	おおさかふふじいでらし 大阪府藤井寺市 かわきたいっちょうめちない 川北1丁目地内	27226	80	北緯 34度35分11秒 東経 135度36分31秒	20150803 ～ 20150930	181㎡	バイパス送水管 (藤井寺～長吉) 整備
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構		主な遺物	特記事項	
川北遺跡	生産	古代	畦畔（水田）		黒色土器・須恵器・ 土師器・木製品・種子・ 木実	古代水田面を2面検出	
		中世 中世～古代	溝 畦畔		瓦器・須恵器・土師器・ 木製品・種子	中世～古代水田面を1面 検出	
要約	<p>1 トレンチでは攪乱が著しく遺構は確認できなかったが、遺物は出土した。T.P.+10.53～10.43mに近い所で砂礫層を確認し、洪水堆積層か流路の存在が推測される。</p> <p>2 トレンチでは第1面で鋤溝、第2面で溝・足跡、第4面で畦畔、第6面で畦畔・足跡、第7面で畦畔・足跡を検出した。第1面は畠、第2面～第7面は水田と考えられ、中世から古代にかけて水田耕作が行われていた。洪水や地震による影響もあったようである。</p>						



公益財団法人大阪府文化財センター調査報告書 第264集

## 川 北 遺 跡 2

バイパス送水管（藤井寺～長吉）整備工事に伴う  
埋蔵文化財発掘調査報告書

発行年月日 / 2016年 2 月29日

編集・発行 / 公益財団法人 大阪府文化財センター  
大阪府堺市南区竹城台3丁21番4号

印刷・製本 / 株式会社 近畿印刷センター  
大阪府柏原市本郷5丁目6番25号